# シンフォギア・ウルフ

狼ルプス

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、１人の少年が強盗事件で人を庇い死んだ。

目覚めると何も無い空間にいた。そこで青年はとある神様から仮面ライダーバルカンの特典を授かり、歌姫の存在する世界に転生した。戦いに巻き込まれながらも必死に生きていく青年の物語である。

# 目次


第1話　転生 ―― 1
第2話　惨劇 ―― 11
第3話　二年後と新たな歌姫の誕生 ―― 21
第4話　正体 ―― 29
第5話　特異災害対策機動部二課（通称　特機部二） ―― 38
第6話　相応の覚悟と新たなる力 ―― 47
第7話　剣のウルフと諸刃の剣 ―― 59
第8話　青い狼とゲーマードクター ―― 73

# 第1話　転生

「どこだここ？確か俺は・・・」

ありのまま起こった事を説明する。あの時、銃を所持した一人の銀行強盗が突然現れ、周りを威嚇し始めたのだ。強盗は興奮していたのかあたり構わず乱射して物を壊していった。そして、あろうことか妊婦を次の狙いと定めたようだった。俺は咄嗟に強盗犯に近づいて羽交い締めにし、何とか弾道を逸らすことができた。しかし強盗はすぐ俺を押し返すと再び銃声が響かせた。自身を見ると着ていた白いシャツは真っ赤な血に染まっていた。

幾人かの悲鳴を上がる中、俺は一矢報いるため力を振り絞り、強盗犯を殴り飛ばした。強盗犯は吹っ飛んでしまい意識を失った。その後の事は覚えていない。気がついたらこの真っ白な空間にいた。

「目覚めましたか？」

突然後ろから声をかけられた。すると目の前に綺麗な金髪の女性が立っていた。

「誰だ？」

「私ですか？私は女神、とはいえ転生の神です。気付いてるかもしれないですが、…あなたは死んでしまいました」

「そうか・・・やはり俺は、それと女神と言ったか？神様って人間とそう変わらないんだな」

見た目は綺麗だが、普通の女性と変わりない見た目をしており神様というイメージほどの姿ではなかった

「……教えてくれ、あの後、強盗犯はどうなった？他の人達は無事なのか？」

「記録によるとあの後、逮捕されたとの事です……被害者は全員無事です、貴方以外は」

「そうか……なら良い」

俺は安堵して、そう告げた。

「優しいんですね、自分より他人の心配をするなんて…」

「お前が神ならわかると思うが、俺は決めた事や『正しい』と思った事は必ずやる……話は変わるが、何故俺を此処に？」
「そうでしたね、実は、本来貴方はこの事件で死ぬはずのない人だったのです……なので貴方を転生させる事となりました、『別の世界』にですが。」
「転生？別の世界と言ったが何処の世界だ？」
「貴方の場合は、『戦姫絶唱シンフォギア』と言うアニメ世界です」
「……何だ、それは？」
俺は神にそう訊いた。
息抜きにゲームをやったり小説を読んだりする事はあるが、アニメや漫画の類は一切見ていないからわからん。
「結構有名なんですが、知らないのですか？」
「知るか」
「そうですか……では軽く内容を話します」

そして数分後、

「……と、大方こんな感じです」
「成る程、随分と物騒な世界へ放り込むみたいだな……まぁ良い」
神の話を聞いた俺はそう答えた。
「無論、そんな危ない世界に丸腰で貴方を送るつもりはありません。ですので貴方には特典をつけたいと思います」
「『特典』ねぇ……よし！俺が望むものは1つ、〝転生しても自分の記憶と名を消さずに転生先でも引き継がせる〟事だ」
「えっ？それだけですか？他の人は、色んなものを頼むのですが……」
「次に行く世界でも俺は俺であるつもりだ。ならば持って行くもは自ら学んだ知識や、鍛え抜いた身体だけで十分だ」
俺は神にそう告げた。
俺は自分に誇りを持っている。ノイズだの錬金術師だの聖遺物だ

のよく分からないものなど関係ない。生前と変わらずいられるのならそれで十分だ。

「しかし……これから行く世界は先程私が説明した通り厄介なものですよ。〝ノイズ〟は普通の人間では倒す事は不可能ですし、貴方の性格上、無謀に挑みに行って消し炭にされるのがオチです。」

「……覚悟の上だ」

「いえいえ、その、丸腰というのは、やはり……」

「ハァー、わかった……残りの俺の転生特典は勝手に決めてくれ。さっき俺が望んだ事を叶えてくれるなら俺は一向にかまわん」

少し貶されたような気もしたが、今は目の前の神の言う通りにすることにした。

「いえ、ですから勝手にと言われましても……ん？」

神はそう言うと何を思ったか、俺の顔を見つめ、タブレットのようなものを出し、その画面をジッと見つめた後、俺に顔を近づけた。いや、その前にどこから出したんだ、それは？

「貴方の名前……少し違いがありますが、この顔も……生まれつきですか？」

「不服か？」

失礼なやつだな、この顔は……俺にとっては、亡くなった両親から受け取った最高のプレゼントだ。

「これで良し！決まりましたよ」

「そうか、決まったのなら早くしてくれ…そうだ、最後に一つ確認してもいいか？俺が助けた妊婦とお腹の中の子どもは無事なんだよな？」

「先程言ったとおり、貴方が助けた女性は無事ですよ。あの後、陣痛が来たらしくそのまま病院に搬送され無事に生まれました。因みに男の子です。」

「そうか、よかった、俺は……守ることができたんだな」

そう言うと俺の足元が光りだし、徐々に体が消えていった。

「生まれた赤ん坊の名前は、貴方と同じ名前みたいです。余計かもしれませんが一応伝えておきます。それでは新たな人生が素晴らしい

ものになる事を祈ります、行ってらっしゃい…不破イサムさん」
神がそう言ったと同時に俺…不破イサムの意識は無くなった。
しかし女神は何やら腕を組み考えていた。
「うーん、考えれば流石にあれを常時持たせるのはまずいかな……
あっ、そうだ！あれをウォッチ化させて持たせれば不審に思われないはず！本来の装備より武器とキーも追加させて……バイクもあれを改造させて送っておこう！」

転生してから2年後――――
転生してから2年の月日が流れた。
不破イサムは1人で人類の天敵〝ノイズ〟を撃退し続けていた、そう、変身した時からずっと……。
そして今現在、イサムはある廃工場の前にきていた。
「見つけたぞ…ノイズ共！」
『『『℃＄@＊,●○○▲▼◇※〒』』』
イサムが廃工場の中に入ると、そこには大漁のノイズがいた。
ノイズがいることを確認したイサムは、青い拳銃の付いたバックルを腰に装着し、四角形状の〝プログライズキー〟を取り出し、
「お前らは…この俺がぶっ倒す！」
《バレット！》
ボタンを押す。しかし施錠されているのか中々展開できないのがイサムにとって不安要素だ。
「ッ～ラァっ！」
ギギギギギ！と音を鳴らしながら、力尽くでキー形状にして展開す

る。
「フンッ！」
《オーソライズ！》
プログライズキーを銃に装身させる。
《ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ　ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ　ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ》
イサムは銃をバックルから外し、目の前にいるノイズに狙いを定める。
「変身!!」
《ショットライズ!!》
一発の弾丸が放たれノイズ達に直撃しながらイサムの元に戻る。
そしてイサムが弾丸を拳で殴ると、銃弾が弾け、装甲を足から順に身に纏わせる。
《シューティングウルフ！》
《Ｔｈｅ　ｅｌｅｖａｔｉｏｎ　ｉｎｃｒｅａｓｅｓ　ａｓ　ｔｈｅ　ｂｕｌｌｅｔ　ｉｓ　ｆｉｒｅｄ．》
《ブレードライズ！》
そしてイサムは持っていたカバン、アタッシュカリバーをカバン形状から剣に変えてノイズの大軍に突っ込んだ。

一方その頃、ある組織では……。
「司令!!ノイズが現れたポイントに、別の反応を確認!!」
「別の反応……まさか」
「パターン確認!!ｕｎｋｎｏｗｎです!!」
「奏!!翼!!お前たちが向かっているポイントで、ｕｎｋｎｏｗｎがノイズと戦闘している!!」
『ホントか!!』
「毎度の事だが、ｕｎｋｎｏｗｎと接触したら此方に来るよう説得してくれ!!」

『了解です、叔父様‼』
『任せときな‼』
奏と翼と呼ばれた人物との通信を終え、再び画面に目を向けるのは、風鳴弦十郎……組織の司令官である。
そこに、異端技術〈聖遺物〉を動作させる〈櫻井理論〉を提唱する天才研究員で、聖遺物に加えて本部及び防衛システムの管理や、シンフォギア適合者達のメディカルチェックなど、この場の組織の主要技術を一手に担当している女性、櫻井了子が、弦十郎に話しかけてきた。
「何者なのかしらね？ｕｎｋｎｏｗｎって？」
「分からん。おそらく敵ではないのは確かだろう」
そう断言した弦十郎だが、数年前からｕｎｋｎｏｗｎと遭遇するも、説得に失敗して逃げられたり、力づくで押さえ込もうとして返り討ちにされたりとうまくいっていないのが現状だった。
場所は戻り廃工場
「ふん‼」
『『『∞℃??@#%%&&⁉』』』
イサムは、アタッシュカリバーで次々とノイズを蹴散らしていく。
だが、ノイズは消えるどころか、増える一方であった。
「……チッ、キリがないな。だったら、これならどうだ！」
アタッシュカリバーをカバン形状に戻す。
《チャージライズ！》
待機音が鳴り、イサムは再び展開させる。
《フルチャージ！》
するとアタッシュカリバーに、黄緑色のエネルギーが蓄積される。
イサムはトリガーを押し剣を振る。
「ハァ‼」
《カバンストラッシュ！》
緑色の斬撃が放たれ、ノイズ達ら真っ二つになり倒れていく。
この一撃でかなりの数が減った。イサムはバックルから銃を抜きノイズに狙いを定め撃つ。

『『『『@◇&#??☆#%@!!』』』』
イサムは、攻撃の手を緩めず、ショットライザーで次々とノイズを撃ち抜いていった。
「ぶっ潰す！」
そう言うと、イサムは、アタッシュカリバーを粒子状にして手放す。
《バレット！》
使っていたショットライザーに装身したプログライズキーのボタンを押す
「ハアアアアアア」
ショットライザーを残ったノイズに構える。銃口に青いエネルギーの弾が凝縮されていく。
「ハァッ！」
トリガーを押すと、青い大きな弾丸が放たれた。

『『『『#%＊℃?@§$℃&#!!』』』』
《バ
レ
ッ
ト
シューティングブラスト！》
ショットライザーから放った必殺技、シューティングブラストを放ち、ノイズを一掃した。
「……ハァー……これで終わりだな。……ん？」
ノイズがいないことを確認するイサムだったが、遠くからバイクのエンジン音が聞こえてきた。
「また奴等か……毎度毎度しつこいな」
誰が来たのか察したイサムは変身を解除し、ウォッチの形状に戻してからポケットにしまう。そして待機させたバイクに乗りその場から去る。
その5分後、バイクに乗った奏と翼、車に乗った組織の職員が到着した。

「狼野郎‼どこだ‼」
「……どうやら、ｕｎｋｎｏｗｎはいなくなったみたいね。ノイズもいないみたい」
「ダァー！クソッ‼また逃げられた～‼」
「司令、ｕｎｋｎｏｗｎの反応はありますか？」
『いや、お前たちが来る５分前に反応が消えた。恐らく勘づいて離れたのだろう。ｕｎｋｎｏｗｎの捜索は此方で、やっておく。お前たちは戻ってこい』
「分かりました」
「りょうか～い」
弦十郎の指示に従い、奏と翼は本部に戻っていく。

イサムは住んでいるマンションの家に戻りベッドに横たわる。
「フゥー、疲れたな…ったくあの神様、なんでこんな部屋に俺を住ませたのかね」

イサムが住んでいるマンションの部屋は２ＬＤＫ。それはマンション暮らしの人達なら半数以上の人が羨む物件である。

転生当時に遡る
転生時、イサムは、朝の日差しで目を覚ました。目覚めた時、イサムは仰天した。生前でもこんな部屋に住んだ事はなかったからだ。家の中を探るため、リビングに向かうと、テーブルの上に手紙とスマホ（？）、そして四角形の物体に通帳、時計のような物が置いてあったのだ。イサムは手紙に手に取り読み始めた。
『貴方がこの手紙を読んでいるという事は、無事に転生できたみたいですね。手紙以外にあるのは貴方が生きていくために必要なものです。他に貴方をサポートしてくれるアイテムもありますが、まずは時

計のようなものを表面を回して顔になるようした後でボタンを押してください。』
イサムは手紙を一旦テーブルに置き時計のような物に手に持つ
「顔になるようにって…こうか？」
表面を回したイサムはボタンを押す。
《バルカン！》
「グッ！うっ…うう！」
ボタンを押した途端イサムは頭を手で押さえる。頭の中に色んな情報が流れ込んできたからだ。

「ああ、はぁ…はぁ…はぁ、なるほどな、これが神様の選んだ特典の一つか」
イサムはお腹辺りを見ると青い拳銃のついたバックルを装着していた。
「確かに…この状態じゃ持ち歩けないな、見た目はただの玩具みたいだがかなりの重量感だ。警察に見つかったら銃刀法所持違反で警察行きだなこれは」
バックルを外すと先程の時計の形状に戻ってしまう。バックルを自分で外すとウォッチ状に戻るみたいだ。
「次は…これか、スマホにしてはやけにデカないな…それでこのキーを展開せずに挿し込むっと」
《チェンジライズ！》
「うおっ！」
スマホが手から離れ一気にバイクに姿を変えたのだ
「こいつはスゲェ。場所を考えて変形させないと下手すりゃ大騒ぎだな」
普通の技術では不可能なため周囲を考えながら変形させなければいけない。イサムはバイクの状態からスマホに戻す。
「とりあえず手紙の続きを読むか」
イサムは再び手紙を手にする。
『そうすれば、この世界での情報や力の使い方、アイテムの使い方もわ

かるはずです。バルカンの力はノイズやアルカノイズに対抗できるようこちらにで改造しているので炭化する事はありません。
『それから、免許などは既に習得してる事になっているので安心してください。通帳にはお金を振り込んでいるので確認してください。これからの生活には困らない程度はあります。』
『私が伝えるのは以上です。なおこの手紙は貴方が読み終わると消滅する仕組みになっています。
こちらでの貴方の幸せを願っています。この素晴らしい世界に祝福を』
イサムが読み終わると、手紙は光の粒子状になり消えていった。
「あの神様……余計な心配はいらねぇよ。けど…ありがとな…新たにもらったこの命、大事にする」

この日から不破イサムはこの世界で仮面ライダーバルカンとしてノイズを倒していくことになった。

# 第2話　惨劇

俺は不破イサム、生前では強盗事件で射殺され転生した人間だ。現在俺はツヴァイウィングとやらのコンサート会場前にいる。

何故ここにいるかと言うと、半年前、俺が買い物帰りの福引でガラガラを回したところ大当たりが出てしまい、ライブのペアチケットが当たってしまったからだ。俺は友人がいないので渡す相手もおらず、どのみちライブに行くつもりはなかったのだが、あまりにも暇だったので結局行くことにした。今思えば、「虫の知らせ」というやつだったのかもしれない。

「随分と人気だったんだな、あの二人。いっつも戦場でしか見ないからイメージ出来んな。」

イサムは列の最後尾に並び、入場時間を待つ。その時、前にいる少女が顔を青くしてとまどっているのを感じた。イサムは心配に思い声をかけた。

「オイ…お前、どうしたんだ？」

「えっ？えっと…それが、持ってきたはずのチケットをなくしてしまって」

「はぁ？チケットを……？」

「は、はい…ど、どうしよう、未来に勧められてすっごく楽しみにしてたのに」

どうやら少女は友人に勧められてきたみたいだ。今にも泣きそうな顔を見てイサムは念のために持ってきたもう一枚のチケットをバックから取り出す。

「オイ…よければこれ、お前にやるよ」

「えっ、いいんですか！でも…それは」

「もう一枚持ってるから心配すんな、偶然福引で当てて渡すやつもいなかったからな」

「ありがとうございます！じゃあ、遠慮なく頂きます。」

少女は嬉しそうにチケットを受け取り、笑顔になる。

「あっ‼私、立花響っていいます‼」

「……不破イサムだ。好きに呼んで構わん」
「じゃあイサムさんで‼あの、イサムさん、失礼かもしれないんですけど、イサムさんも友だちにすっぽかされた感じですか？」
「いや…俺はさっき言ったように福引で当てたやつだ、ホントは行くつもりは無かったが…暇だったから来ただけだ。それに俺は本当に友人がいない。そう言う立花はすっぽかされたのか？」
「すっぽかされたというか……友だちが急に行けなくなってしまって、もったいないから1人で見ることにしたんです」
「そうか」
数十分後、ようやく入場時間となった。
イサム達は入場すると、とりあえずペンライトを購入し、観客席に移動する。
観客席にはすでに多くの人が座っており、会場は盛り上がっていた。
チケットに書かれた席を探し歩くイサムと響……チケットはペアな為、座る場所は当然響と隣同士となる。
「すごい…始まってもいないのにすごい盛り上がり……」
「そうだな…こういったのは初めての事だ、何だか新鮮だな……ん？」
「あれ？」
突如、会場内が暗くなった。
そして、音楽が流れだし、ステージに明かりが点る。
そこから2人の少女が出てきた。
観客席の人々は、一気にテンションが上がり、会場内は熱気に包まれる。
そしてイサムにとって見覚えのある2人の少女、天羽奏と風鳴翼が歌い始める。
「(本当に歌手だったんだな、戦場の時とは大違いだ……心にビシバシ伝わってくる)」
以前、ノイズとの戦闘後に逃げようとしたら、力づくで連れて行こうとしたため反撃に転じたことがあった。その時はやりすぎたと思い心配したが、後遺症もなくよかった。

今のイサムは2人の歌に魅了される。
イサムが隣を見ると、響が楽しそうにペンライトを掲げていた。
そんな響を見たイサムは、口元を緩ませる。
「(落ち込んでいたわりには、楽しんでいるじゃねぇか。だが何だ？妙に胸騒ぎがする)」
この不安は何なのか疑問を持ったが、今はライブを楽しむことを優先し、静かに二人の歌を聴く。
するといつのまにか歌が終わってしまっており、周りからアンコールのかけ声が会場に鳴り響く。
「もっと盛り上がっていくぞー!!」
『『『『オォオオオオオ!!』』』』
会場内は盛り上がり、歌が再び始まろうとしたその時、
ドガァァァァァァァン!!
「な、なに？」
「なっ！爆発!?」
突然ステージの一部が爆発した。
それからすぐ、上空から正体不明の物体が会場内に降りてきた。
「の、ノイズ!?」
「ノイズだと!?？……」
人類共通の天敵…認定特異災害ノイズが会場内に現れ、次々と人々を襲っていった。襲われた人々は灰となって消えていった。
「人が……!!」
「チッ!!立花!!お前は逃げろ!!俺は逃げ遅れた連中を避難させる!!」
「えっ？イ、イサムさん!?」
イサムはその場から立ちあがって駆け出す。すると、1人の女の子が泣きながら立っていた。そして、その女の子にノイズが迫っていた。
「くそっ!!」
イサムは女の子に向かって駆け出した。ノイズが女の子に近づき、触れようとした瞬間、イサムがギリギリ女の子に抱きつき、転がりな

がら魔手を回避した。
「オイ、大丈夫か？」
「あ、ありが……ヒグ……とう……ヒグ……お兄ちゃん」
「ナナ‼」
「お母さん‼」
　イサムに助けられた女の子は、母親の元に駆け寄り抱き締められる。そして母親はイサムに顔を向ける。
「ありがとうございます‼ありがとうございます‼」
「礼はいい‼ここから早く逃げろ‼」
「はっ…はい‼」
　母親はイサムに礼を言って、その場から離れる。イサムは後ろを振り返った。そこには、先程までいたノイズはいなくなっていた。イサムではなく、響に狙いを定めたようだ。
「立花‼逃げろ‼」
「あ……イタっ……‼」
　逃げようとする響だったが、足を怪我してしまい逃げられないでいた。そしてノイズは段々と響へ近づいていく。イサムはフードを深く被りポケットからファイズフォンxを取り出しガンモードにして構える。
　だがその時、
「はぁあああ‼」
『『『ッ⁉』』』
　奏が聖遺物の欠片からできた鎧型武装〈シンフォギア〉の1つ〈ガングニール〉でノイズを薙ぎ払い、響を守った。だが今度は、奏を狙ってノイズが攻撃する。
「早く逃げろ‼」
「くっ‼」
　響は痛めた足を引摺りながら逃げようとする。奏はノイズの攻撃を必死に防ぐが、段々と押されていくにつれ、ガングニールに亀裂が入る。
　やがて亀裂が入った部分が砕け、後方に飛んでいく。

そして、その砕けた破片が響に突き刺さってしまった。
「しまった!!」
「ッ!??立花ぁぁぁ!!」
奏とイサムは響の元に駆け寄る。
「立花!!しっかりしろ!!」
「おい!!しっかりしろ!!目を開けてくれ!!生きることを、諦めるな!!」
すると、二人の必死の呼びかけに答えるかのように、響がうっすらと目を開ける。
「……体の中、全部空っぽにして、おもいっきり歌ってみたかったんだ」
奏はそう言いながら立ちあがり、ノイズがいる方をむく。
「今日はこんなに聞いてくれる奴等がいるんだ……あたしも全力で歌うよ」
「……何をする気だ?」
「あんたはその子を連れて逃げてくれ。今からどでかいのをするか
「お前…自分を犠牲にして奴等を道連れにする気か?」ッ!?」
驚いた奏は、後ろを振り返りイサムを見る。
「……なんで」
「その様子だと当たりみたいだな、簡単に言えば俺の勘だ。雰囲気が覚悟を決めた戦士そのものだからな。だがな、それじゃあ奴等の思うつぼだぞ。この場はなんとかできるかもしれんが、この先のことを考えたら、メリットは奴等にしかない」
「じゃあどうしろってんだよ!?他に方法があるなら教えてくれよ!!?」
「俺が、奴等をぶっ潰す」
「えっ?」
そう言ったイサムは、響を抱え壁に寄りかからせ、ノイズに向かって歩き出す。
それを遠くで戦いながら見ていた翼は、ノイズを斬り払い、奏の元に駆け寄り、イサムに声をかける。

「ち、ちょっとあなた⁉」
「お、おいあんた‼普通の人間じゃノイズは‼」
「安心しろ。俺は普通じゃない……と言うか、お前らとは何度か会ってんだろ」
「「えっ？」」
イサムの言ってることを理解できない二人を残し、
《バルカン！》
イサムはウォッチを起動させ手にショットライザーの付いたバックルを持つ、バックルを装着しベルトを右側に連結させる。そして、バックルについたショットライザーを手に取り、左手にはプログライズキーを持つ。

「その拳銃……まさかあんた！」
「……ノイズ共…お前らは、俺がぶっ潰す！」
《バレット‼》
イサムは親指に力を入れプログライズキーを無理やり展開させショットライザーに装身する。
「フンッ！」
《オーソライズ！》
《ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ　ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ　ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ》
イサムは銃を目の前にいるノイズに向ける。
「変身‼」
《ショットライズ‼》
一発の弾丸が放たれ、迫ってきた一体のノイズに直撃し、イサムの元に戻る。
「ハアッ！」
イサムが迫ってきた弾丸を拳で殴ると、銃弾が弾け、身体に装甲を身に纏っていく。
《シューティングウルフ！》

《Ｔｈｅ　ｅｌｅｖａｔｉｏｎ　ｉｎｃｒｅａｓｅｓ　ａｓ　ｔｈｅ　ｂｕｌｌｅｔ　ｉｓ　ｆｉｒｅｄ.》

奏と翼は目の前の前の青年の姿が変わり目を見開き驚いていた。しかも二人がよく知っている相手だったから尚更だ。

「お前…ｕｎｋｎｏｗｎだったのか！」

「訂正しておく……俺はｕｎｋｎｏｗｎじゃあねぇ、バルカンって名前がちゃんとあるんだよ」

「バルカン…」

翼は静かにバルカンの名を口にする。

《アタッシュカリバー！》

するとバルカンの横にカバンが現れた。

「…カバン？」

「カバンじゃあねぇ、武器だ。」

《ブレードライズ！》

『『『!?!?!?!?!?!?!?!?』』』

カバン状態から剣に変形させ、バルカンはノイズに近づき、アタッシュカリバーで横一閃に斬り裂く。

数体攻撃を受けたノイズは、灰と化して消えた。

「お前ら雑魚じゃ俺の相手になると思うな」

「あいつ…やっぱり強い」

「彼の使っている力は……、いったい」

二人は、バルカンがノイズを次々と倒して行く姿に呆然としていた。かつて実力行使で連行しようとして返り討ちに遭った苦い記憶が頭をよぎる。

一方バルカンは、ノイズを蹴散らしていく。その時、１体のノイズが、バルカンを後ろから襲おうとしていた。

「ま、まずい!!」

「バルカン!!」

奏と翼はバルカンに危険を知らせようとした時には、ノイズはバル

カンに攻撃を仕掛けていた。
だが……
バキュン！
『⁉⁉⁉⁉⁉⁉』
「俺を後ろから襲うなんざ……１００年早いんだよ！」
バルカンは、ノイズの攻撃が当たる寸前で、ショットライザーを後ろに向けて、ノイズを撃ち抜く。撃ち抜かれたノイズは炭化した。
「ま、まじかよ……」
「相手を見ずに……撃ち抜いた……」
「……」
二人はバルカンの対応に驚きを隠せなかった。それに構わず、バルカンは、無言でノイズがいる方を見る。
「まだこんなにもいるか……だったらこいつだ！」
《アタッシュショットガン！》
使っていたアタッシュカリバーが粒子状になって消え、新たに水色の線のあるカバンが現れた。
《ショットガンライズ！》
カバンを展開させ銃の形になる。そしてバルカンはベルトにあるホルダーから別のプログライズキーを手に取る。
《パワー！》
《Ｐｒｏｇｒｉｓｅ　ｋｅｙ　ｃｏｍｆｉｒｍｅｄ．　Ｒｅａｄｙ　ｔｏ　ｕｔｉｌｉｚｅ》
《コングズアビリティ！》
プログライズキーをショットガンに装身し待機音がなる。銃口にはエネルギーが溜まり大きさを増す。
「ハアァァ……フンッ‼？」
機械的なゴリラの腕のエネルギー弾が発射される。しかし一発だけでもアタッシュショットガンは反動がある。普通に撃つのには慣れたが、今の形態で必殺技を放つとかなりの反動が来る。
『『『『⁉⁉⁉⁉⁉⁉⁉⁉』』』』
《パンチング！カバンショット‼》

ノイズに直撃し爆発を起こす。バルカンの一撃はノイズの数をかなり減らした。
「た、たった一発で……」
「あんなにいたノイズを……」
「あとは、あのデカブツだけか」
驚いてばかりの二人を他所に、バルカンは、最後の1体となった大型ノイズの方を向く。

その瞬間、バルカンは、ノイズに向かって駆け出す。
「バルカン⁉」
「次で終わらせる‼」
『‼‼‼‼‼‼‼‼‼‼‼‼‼‼‼‼‼‼‼‼』
大型ノイズは、バルカンを狙って液体を放出する。しかし、バルカンはその場で空中に跳び、攻撃を回避する。
そして、
《バレット‼？》
ショットライザーを再びバックルに装着し装身しているプログライズキーのボタンを押し、トリガーを引く。
「これで…終わりだぁぁぁぁ‼」
『⁉⁉⁉⁉⁉⁉⁉⁉⁉⁉⁉⁉』

《バレットシューティングブラスト！》

《フィーバー！》

空中に跳んだバルカンは、足に青色のエネルギーを蓄積させて、ノイズに向かって蹴りを喰らわせる。
喰らったノイズは、悲鳴のようなものをあげながら灰となって消えた。
「……」
「やっぱ凄いなお前‼」

「ん？」
　終わったのを確認したバルカンは後ろから奏の声に振り向く。
「あれだけいたノイズをあんなあっさりと片づけちまうなんて…流石だよ」
「……そうか」
「バルカン……前から気になってはいたけどあなたの使っている力は…いったい何なの？」
「……（さて、どうやり過ごすか、かと言って立花をあのまま放置するわけにもいかない。あいつには申し訳ないが…こいつらに任せた方がいいな）」
「オイ…お前ら、あいつをあのままにしていいのか？手遅れになるぞ」
「あっ⁉？そうだった！早くあいつを病院に連れていかねぇと！」
《ウィング！》
　バルカンは二人が響に駆け寄ったその隙にプログライズキーを起動させスマホに挿し込む、画面をタッチすると、スマホが変形し飛行形態になりバルカンの背中に連結する。
「なっ⁉？逃げる気か！」
「悪いな…後のことは任せるぞ！」
　バルカンは飛行し、ライブ会場から去って行く。
　バルカンが飛び去った後、２人の仲間である〝特異災害対策機動部〟がきて、響を病院に運び、会場の瓦礫撤去を始めた。

# 第3話　二年後と新たな歌姫の誕生

コンサート会場での事件が起きてから2年の月日が流れた。
コンサート会場での事件で重傷をおった少女――立花響――は海を臨む高台に建てられた音楽学校――私立リディアン音楽院高等科――に通っている。そして、その少女は、現在食堂で項垂れていた……。
「うう……朝からクライマックスな気分だよ～。私、呪われてるのかな～？」
「元気だして、響。確かに響は授業に遅れたけど、人としてはいいことしたんだから」
「……うん、ありがとう未来‼」
「ふふ…どういたしまして」
幼馴染みでルームメートである少女――小日向未来――の励ましで、元気になったようだ。
「そういえば、今日だっけ？翼さんの新曲の発売日」
「うん‼学校が終わったらすぐに買いに行くんだ‼未来も一緒に行かない？晩ごはんは、おばちゃんのお好み焼きで‼」
「……ごめんね、響。明日までに出さないといけないレポートがあるから、今日は無理なの」
「そっか～。じゃあまた今度ね‼」
「うん」
その後、響は昼食をとり、午後の授業を受けた。
それから数時間後、午後の授業を受け終え、放課後のＨＲが終わった響は、未来に「行ってくるね‼」と告げて、
学校を後にした。
ＣＤショップに向かう道中、響はふと2年前の事を思い出していた。
「(私が見た、奏さんと翼さんは、ノイズと戦う戦士だった。だけど、ニュースや新聞では軍の人たちがノイズを鎮圧したってなってる。私が見た奏さんたちは……幻だったのかな？それに……)」

響は足を止めて立ち止まる。
「(あの仮面の人は誰だったんだろう……でも、私はあの仮面の人を知ってるような気がする。)」
響は仮面の戦士の事が気になり、考え込んでしまった。
と、その時、
「道のド真ん中で立ち止まるな、響…危ないぞ」
「えっ?ああ‼す、すみません……って!イサムさん!」
注意され、謝りながら後ろを振り返ると、響の知る人物が目に映る。
「卒業祝い以来だな…響、ったくお前は……周りを見て立ち止まれよな」
「アハハハ……ごめんなさい、ちょっと考え事をしてて」
そう、響に注意したのはイサムであった。惨劇後、二人は色々あって、交流関係を深めていく内に名前で呼び合うようになった。それは未来も同様である。

この後、響とイサムは、近くの喫茶店へ足を運んだ。
「ごめんなさい、ジュースご馳走になってしまって」
「気にすんな。俺が好きでやってる事だ」
「ありがとうございます」
しばらく会話もなく、響はオレンジジュースを、イサムはコーヒーを口にする。一口飲むとイサムは口を開く。
「そういえば…未来はどうした?今回は一緒じゃないのか?」
「未来は明日までに提出しないといけないレポートがあるみたいで…今回は私一人です」
「そうか…ところで、あいつらは元気か?何も問題を起こしてないか?」
「はい!元気ですよ!あの時は、本当にありがとうございます!あの子達のおかげで私とお母さんとおばあちゃん、未来はあの二年間何もなく過ごすことができたんです。今でもリディアンに持ってきてるんですよ」

「……そうか…あいつらもお前らに懐いていたからな……安心だ」
イサムは、2年前、気分転換に響の住んでいる街にバイクでドライブに来たことがある。その時、暴力やいじめを受けている響を目撃したのだ。イサムがバイクを止め、暴漢達の間に入って止め、理由を問いただすと、とんでもない答えがかえってきた。それで、怒りを覚えたイサムは連中を力でねじ伏せて殺意を込め脅し追い払ったのだ。
そして、響のそばにいた友人で幼馴染の未来に詳しく事情を聞き、ライブでの事件が原因だと悟る。
自分自身は迫害など無かったが、響の家族まで迫害に遭っているのを知った。未来に手伝ってもらいながら全身あざだらけな響を手当てした。
更に怒りを覚えたイサムは、常備していたサポートアイテムをバイクから取り出し、ディスクアニマルやカンドロイド、ライドガジェットのコダマスイカアームズとタカウォッチロイドを起動させた。
響と未来は俺が取り出し展開させたメカ系のアニマルを見て驚いた表情をしていた。俺は、生活に支障がないよう響やその家族、未来の護衛すること、そして、手を出した奴にはバレないよう痛い目に遭わせることを指示した。
効果抜群だったのか響や家族を迫害をしていた連中は響に手を出すこともなくなり、家にあった張り紙や落書きもしなくなっていた。
その時、互いにの連絡先を交換し状況確認の為、未来に話を聞いたところ、どうやら響や家族に何かしたらタタリが起こると噂が流れてしまったようだ。しかし、唯一響の親友であり支え続けた未来には異変がなかった為、タタリの信憑性が増し、立花家に手を出した連中は避けるようになった。このことは、立花家や未来にとってはありがたいことだった。
事が落ち着いてアニマル達を回収に行こうとしたらアニマル達は響や未来に懐いてしまい離れなくなってしまっていたのだ。
俺は仕方なく響達に一部のアニマルを任せることにした。周りにはアニマル達の事を外部に漏らさないよう念を押し、未来にはディスクアニマルを展開させるための「音角」と呼ばれる音叉型のアイテム

を渡して使い方を教えた。未来はディスクアニマルにかなり懐かれていたからだ。

「……そういえば…学園生活はどうだ、楽しいか？」

「はい‼毎日充実してますよ‼」

笑顔で答える響の様子から見て嘘はないみたいだ。

「今日未来からメールで聞いたが、お前…木から降りれなくなった猫を助けて遅刻したらしいじゃないか」

「未来ってばそんなことまでイサムさんに教えたの⁉？」

「ハハハッ！、まぁ…人助けが趣味なお前らしいがな」

響はあれ以来、困った人を放っておけなくなり、人助けが趣味になっている。おそらくあの時の天羽奏の影響もあるだろうが……。

「今更なんだか、お前が通ってる高校って確か有名な音楽学校だったか？」

「そうですよ‼しかもリディアンには、あのツヴァイウィングの奏さんを輩出し、しかも翼さんが現在通っている学校なのです‼」

「へぇー（驚いた…まさかあの２人に関わりがある学校とはな……しかし）……ふっ」

響の顔を見たイサムは、少し笑ってしまった。自分を見てイサムが笑っていることに気づいた響は、何かしたかと思い慌ててしまう。

「えっ？何で笑うんですか⁉」

「ワリイ。あのコンサートでツヴァイウィングにあまり興味がなかった響が、ここまで自慢そうに言うぐらいのファンになっているとはな」

「うぅ、言わないでくださいよ～」

「ふっ。……そういえば響、何か買う物があってきたのか？確かリディアンは全寮制だったろ？」

「そうなんです‼今日発売される翼さんの新曲のＣＤを買いに、外出して来たんです‼」

「風鳴翼のか？お前…それちゃんと予約したのか？」
「ううん、してないけど」
「そういう有名歌手のＣＤは予約していない限り、ファンが朝から並んで買うものじゃないか？」
「えぇぇぇぇぇぇ⁉そうなんですか⁉どっ、どうしよう⁉」
　イサムから言われ、響は慌て出す。そんな響に、イサムが救いの手をさしのべた。
「響、とりあえず落ちつけ」
「で、でも‼」
「そうだろうと思って俺が予約してお前の分も買っておいてやった、ホラ」
　イサムはバッグから風鳴翼の新曲ＣＤを取り出す。
「えっ？これって！翼さんの新曲のＣＤ！しかも数百人限定の特典付きだ‼？」
　響はイサムが取り出した物をみて驚いていた。
「……　いいんですか！これ、もらってしまって」
「別に構わん、俺は特典には興味なかったからな、ＣＤが買えれば俺は充分だ。」
　イサムはツヴァイウィングの歌を聴いてＣＤを買い始めた。響みたいにファンではないが歌自体は気に入っているので最近はよく聴いている。特にイサムは天羽奏のシングルソングをよく聴く
「イサムさん……ありがとうございます‼？」
　イサムは、答えの代わりに、残っていたコーヒーを全部飲み干した。響は嬉しそうに特典付きのＣＤを手に持つ。
　そしてイサムは、響の分の代金を支払い、彼女と喫茶店から出る。片耳にイヤホンをつけ歌を聴こうとすると突然響がもう片方のイヤホンを耳に近づけ聴く、響はニヤニヤしながらイサムを見る。
「……なんだよ？」
「イサムさんも翼さんのファンだったんですね～」
「ファンって程じゃねぇよ。個人的に歌がいいだけだ」
「へ～」

「……用はすんだだろ。そろそろ帰るぞ」
「あっ‼ま、待ってくださ～い‼」
慌ててイサムを追いかける響。
それから帰る道中、響は貰ったＣＤを大事そうに抱えながら歩いていた。
「今日はありがとうございます、イサムさん‼」
「気にすんな」
「～♪～♪」
鼻歌を歌いながら歩く響と、響を見ながら微笑むイサム……だがイサムは何かを感じ取り、表情は厳しいものへと変わった。
そして響は、イサムが止まったことに気づき、イサムの方に顔を向ける。
「？……イサムさん？」
イサムの視線の先に目を向けると、そこには、大量のチリのような物があった。
「コレは⁉」
「ノイズ……」
「きゃぁぁぁぁぁぁ⁉」
「ッ⁉悲鳴⁉」
「あっちからか‼」
イサム達は悲鳴が聞こえた方に走り出した。駆けつけると、１人の少女が怯えながら座りこんでいた。少女の視線の先に、大量のノイズがいたからだ。
イサムと響は、すぐに駆け出した。響が少女を抱き抱えて奥の路地へと入っていく。
「オイ…大丈夫か？」
「うん‼ありがとう！お姉ちゃん‼お兄ちゃん‼？」
「良かった～」
「……」
少女がなんともないことを知り、響は安心する。イサムは無事を確認すると、無言のまま後ろを振り返る。振り返るとそこには、大量の

ノイズが迫っていた。
「……響、走れるか？」
「えっ？うっ、うん。走れますけど」
「俺がノイズの気を引く。その間にお前はその娘を連れて逃げろ」
「で、でも‼それじゃあイサムさんが！」
「いいから行け‼みんな揃って死にたいのか‼？」
「……ッ‼」（ビクッ）
響は納得はしなかったが、イサムに言われた通り、少女を連れて奥へと走っていった。
「絶対に生きて戻ってきてよ‼？イサムさん‼？」
響達が走り去ったのを確認したイサムは、ウォッチを起動させバックルについたショットライザーを腰に装着する。
「ノイズ共……ここから先に進めると思うな！」
《バレット‼》
いつも通り無理やりプログライズキーを展開させショットライザーに装身させる。

《オーソライズ！》
プログライズキーを銃に装身させ、ショットライザーを構える。
「変身‼」
《ショットライズ！》

《シューティングウルフ！》

「うおあああああ‼」
バルカンへ変身したイサムは、ショットライザーで連射しながらノイズの大軍に突っ込んでいく。

数時間が過ぎた。
イサムと別れた響は、少女を連れて工場地帯に逃げていた。
「はぁ……はぁ……わぁっ‼」

響は足がもつれて少女と一緒に倒れてしまう。
何とか立ち上がるも、大量のノイズに囲まれていたことに気づく。
「そんな……⁉こんなに逃げたのに⁉」
「お姉ちゃん……あたしたち、死んじゃうの？」
絶望する響に、少女は怯えながら響の袖を掴む。
そんな少女を見て響は、少女を抱き寄せ、コンサート会場で奏に言われたことを思い出す。
『生きることを、諦めるな‼』
（そうだ。あの日、あの時、私は間違いなくあの人に救われた――）
（私を助けてくれたあの人は、とても優しく、力強い歌を口ずさんでいた――）
―ドクン―
あの時の事を思い出す響の体に、変化が起こり始める。
（私にできること……できること、きっとあるはずだ‼）
（――歌が）
「お姉ちゃん？」
「生きるのを、諦めないで‼」
響は少女に力強く言い放つ。
すると、響の体が光りだす。
（――とても、優しく、力強い、歌がッ‼）
「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ」
響は歌のようなものを呟いた。
すると響を包むかのように、響の体から光が放出される。
やがて光がおさまると、響の姿が変わっていた。
その姿は、奏や翼と同じ装者の姿であった。
今ここに……新たな歌姫が誕生した瞬間である

# 第４話　正体

　響は現在自分の変化に驚きを隠せない状態だった。
「えっ？なにコレ⁉」
「お姉ちゃん、格好いい‼」
　聖詠を唱えた事により姿が変わり、天羽奏と似通ったシンフォギアを纏った響は、突然の事に戸惑っていた。
　だがその戸惑いも、目の前にいるノイズを見て頭を切り替える。
「（なんだか分からない……けど‼）今なら、何だかいける気がする‼」
　そう言った響は少女の手を握り、頭に浮かんだ歌詞を歌いながらノイズの攻撃を回避した。
「（凄い……ノイズの攻撃を私、避けてる。コレなら）「お姉ちゃん‼後ろ‼？」えっ？」
　次々とノイズの攻撃を回避していた響であったが、少しの慢心が仇となり、ノイズに背後をとられた。
（ま、まずい⁉）
　ノイズに背後をとられ、もう駄目だと思ってしまった。
　だがその時、
《カバンストラッシュ！》
『＃＆？$@§％＊⁉』
「「えっ？」」
　突然緑色の光の斬撃が飛んできてノイズを斬り裂く。斬撃を放ったのはバルカンへと変身したイサムだ。響の背後をとったノイズを、アタッシュカリバーで斬撃を放ち斬り裂いたのだ。
　斬り裂かれたノイズは灰となって消え、イサムと響は背中合わせになるような形で着地した。
「あ、あなたは「何で」えっ？」
「何でお前が、それを⁉？」
　イサムは背中越しに驚いた様子で響に質問した。
　イサムは、内心かなり混乱している。
「え、えっと、分からないんですけど、何か頭に歌詞？って言えば良い

のかな？歌詞みたいなのが思い浮かんで、それを呟いたらコレが体に」
「歌詞ぃ!?……ッ⁉？（まさか…あの時の傷が関係があるのか！確か未来が…響の体に破片が残っていると言っていた。おそらくあの時、天羽奏の武器の破片が今になって響に影響を及ぼしたのか）」
「あの、あなたはコレが何か知ってるんですか？」
「詳しい事は知らん。簡単に言えば、それを纏っている状態でいればノイズを倒せる事ってくらいだ」
「ノ、ノイズを⁉な、なら‼」
「お前は戦うな」
「な、なんでですか⁉」
「今の自分の状態を見ろ。その子を危険に晒す気か？」
「……あっ」
　自分の状態を確認した響は、彼の言葉の意味を理解した。
　響の腕の中には少女がいることに気がついたのだ。
「その娘を抱えながらでは、戦い方を知らないお前じゃ守れん。お前はその娘を守ることだけを考えろ。いいな？」
「わ、分かりました‼えっと……」
「バルカン……仮面ライダーバルカン」
「バルカン……さんですね。私は立花響です‼」
　知り合いが目の前にいるのに自己紹介をしてきた。
「いいか？俺が合図したらこの場から全力で……ん？」
「えっ？」
　バルカンは響への指示を途中でやめ、ある方向に視線を向ける。
　イサムにつられ、同じ方向に視線を向けると、光を放つ何かが、此方に向かって来るのが見えた。
「あれって……」
「あれは……バイクか？」
　近づいて来るバイク……
　そして2台のバイクとその操縦者はイサムたちを横切り、ノイズに向かって加速していく。

「ちょっ⁉あのままじゃ⁉」
「……いや、どうやら心配はいらないようだ」
「えっ？」
バイクの操縦者を心配して慌てる響を落ち着かせるようにバルカンは答えた。
響は何故バルカンがそう言い切ったのか不思議に思いながら、バルカンの顔を覗き、再びバイクの方に視線を戻す。
その時、操縦者たちは空に高く翔び上がり、２台のバイクだけがノイズにぶつかって爆発した。
そして
「Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ」
「Ｃｒｏｉｔｚａｌ　ｒｏｎｚｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｚｉｚｚｌ」
２人の操縦者、翼と奏は聖詠を唱えそれぞれシンフォギア【天羽々斬】と【ガングニール】を纏って、イサム達の前に着地した。
「え……えぇぇぇぇぇぇ⁉翼さん⁉それに奏さんまで⁉」
「……最悪だ」
「大丈夫か２人……じゃなかった！、３人とも‼」
「は、はい‼」
「うん‼」
「問題はない」
「久しぶりに会ったってのに、なんだよその反応は？」
「奏、今は戦闘中なんだから集中して‼それと、久しぶりだなバルカン。あの時は色々と助かった」
「俺が好きでやっただけだ」
「あたしの時と反応違いすぎだろ～‼」
「……さっさと奴らを片付けるぞ」
それを見て、翼は呆れて頭をおさえ、響は話に追いつけず頭が混乱する。
「そうだな‼さっさとノイズども倒しちまおうぜ‼」
「そうね。えっと……」

「ひ、響です‼立花響」
「では立花、あなたはその子を守りながら、ノイズの攻撃を避けることだけに集中して。いいわね？」
「は、はい‼」
「バルカン‼色々話を聞きたいけど、今はノイズを倒すのに協力してくれ‼」
「そのつもりだ。が……その前に」
　イサムはベルトのホルダーから別のプログライズキーを取り出した。
「なんですか…それ？」
「何をする気だ？」
「まさか…あの大きな一発を放つつもり⁉？」
「バカ言え…こんな所でぶっ放したら被害が大きくなるだろうが。戦闘形態（フォーム）を変えさせてもらう」
《パワー！》
　プログライズキーを展開しショットライザーに装身しているウルフのプログライズキーを外して新たなプログライズキーを装身する。
《オーソライズ！》
《ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ　ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ　ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ》
《ショットライズ！》
「フッ‼？」
　イサムはバルカンの状態で一発の弾丸を放つ。戻ってきた弾丸を今回は横払うように殴る。
《パンチングコング！》
《Ｅｎｏｕｇｈ　ｐｏｗｅｒ　ｔｏ　ａｎｎｉｈｉｌａｔｅ　ａ　ｍｏｕｎｔａｉｎ.》
　先程のバルカンとは大きく姿を変えた。装甲（アーマー）がパージするように外れると新たな鎧を身に纏う。見た目は狼からゴリラをモチーフにした姿に変わった。
「え……えええええええ⁉」

「別の姿……だと⁉？……」
「オオカミの次はゴリラかよ」
「悪いか？……さっさと終わらせるぞ‼」
「あ、ああ‼」
「風鳴翼、推して参る‼」
バルカンを先頭に、奏と翼がそれぞれ武器【アームドギア】を構えて、ノイズの大軍に突っ込んだ。
「ハァッ‼」

「はぁあああああああ‼」

「てりゃぁあああああ‼」
『『『『『§＄＃』』』』』
「ほぇえ？？……皆さん凄い」
イサムは、パンチングコングの常時装備のナックルデモリションでノイズを殴り倒し、奏はアームドギアの槍で貫き、翼はアームドギアの刀で次々とノイズを斬り裂いていく。それを見ていた響は驚くことしかできなかった。やがて3人は、1ヶ所に集まる。そして周りにはまだ、ノイズが大量にいた。
「くっ‼まだいるのか」
「どうする？でかいのまで出てきたぞ？」
「……二人とも雑魚を頼んでいいか？」
「ああ、問題ねぇ‼」
「承知した‼」
「ならば、大型ノイズは俺に任せろ。お前たちは残りの雑魚を頼む」

「わかった、頼んだぜ‼」
「行くぞ‼」
イサムに大型ノイズ2体を任せた奏と翼は、ノイズに向かって跳んだ。
「こいつをくらいな！はぁあああああ‼」

『ＬＡＳＴ∞ＭＥＴＥＯＲ』
『％＆？$§＃℃@＊⁉』
「はぁあああああああ‼」
『天ノ逆鱗』
　奏はアームドギアである槍の先端を回転させ、竜巻を起こしてノイズ達を撃破した。
　そして翼は、アームドギアである刀を投擲した後、巨大化させ、それをノイズ目掛けて蹴り貫きノイズは炭化させた。
「流石だな…前よりもかなり腕を上げたみたいだな。俺も決着をつけるか！」
《パワー！》
　イサムはショットライザーを手に持ったままプログライズキーのボタンを押し、２体の大型ノイズに狙いを定める。
「ハァァァァァ……ハァッ‼？」
　トリガーを引き両腕のナックルデモリションが勢いよく発射された。片方ずつ二体の大型ノイズに直撃し大きな風穴が空き、大型ノイズは炭化する。
《パワーパンチングブラスト！》
　イサムは、ナックルデモリションから放たれた両腕で２体の大型ノイズを撃破した。
　一瞬にして大型ノイズを倒したその光景に、響，翼，奏の３人は目を奪われてしまう。
「す、すご～い‼」
「まさか……大型ノイズ２体を一瞬で倒すとは……」
「やっぱスゲーよ‼バルカン‼」
　ノイズを全て倒したバルカンたちは、響と少女の元に歩いていく。
　すると、急に奥から黒塗りの車が何台も出てきて、響たちを囲むように止まったかの思えば、黒服の人が何人も降りてきた。
「……コイツらは」
「そういえばお前は初めて見る連中だったな……大丈夫だ。この連中はあたしらの仲間だ。心配しなくてもいい」

「……」
「ママ‼」
　奏の説明にイサムは納得したその時、響が抱き抱えていた少女が、響の腕の中から抜け出し、母親がいる元に走っていった。
「あの子、お母さんと再会できて良かった」
　母親と抱き合い、笑顔になった少女を見て、響は安心する。
　その時、響が纏っていたシンフォギアが突然光だし、光が収まると、シンフォギアは解除され響の姿は制服を着ていた時の状態に戻った。
　何が起きてるのか分からない響の元に、コップを持った女性が近づいてきた。
「あったかい物どうぞ」
「あったかい物？ありがとうございます。……はぁ～、美味しい」
「よく頑張ったな、立花？」
「あそこで怯えずあの子を守るとは、大した奴だ」
「あ、ありがとうございます‼奏さん‼翼さん‼先程は助けてくれて。実は私、奏さんと翼さんに助けてもらうのは2回目なんです」
「2回目？」
「……もしかして、お前」
　奏がなんのことか分かり、響に言おうとしたその時、奏の通信機に通信が入った。
「こちら奏……うん、ノイズはバルカンと共闘して倒したぜ。……ああ、ガングニールを纏った装者とバルカンもここにいる。……了解」
　通信を終えた奏は通信機をしまい、響に近づく。
「悪いんだけどさ、今からあたしらが所属する組織の本部に一緒に来てくれないか」
「あ、いいですよ」
「サンキュー…じゃあ念のために」
　ガチャン！
「へっ？」

響から了解を得た奏は、どこから取り出したのか分からないが、でかい手錠を取り出して響の腕にはめた。
「えぇぇぇぇぇぇぇ⁉な、何ですかコレ⁉」
「悪いな。念のための処置なんだ。我慢してくれ」
「そんな～‼」
「悪いな……それから」
響に謝った奏は、今度はバルカンに近づいて行った。
「バルカン、あんたも組織の本部に来てくれないか？司令があんたに会いたがってるんだ」
「……」
「頼む……この通りだ‼？あたし達を信じてくれ‼」
頭を深く下げ同行を願う奏の姿に周りは戸惑っている様子だった。
「…ハァ～、わかった、俺の負けだ……ついて行ってやる。」
数年間もの奏達の執念にため息を吐き、遂に観念し同行を受理した。
「えっ‼信じてくれるのか⁉」
「ああ……ただし、そのかわり手錠は無しだ」
「分かった‼だけど、その姿は解除してくれよ、お前と遭遇して素顔も拝んだこともなかったからな」
バルカンと遭遇して以来数年もの間素顔を見た事がなかった奏達、ついにバルカンの正体があらわになるとあれば心中穏やかではない。
「……わかった。」
イサムは奏の指示に従い、ショットライザーからプログライズキーを取り外し、変身を解除する。変身を解除したイサムを見て響が驚く。
「え⁉イ、イサム……さん？イサムさんが、バルカンだったんですか⁉」
「今まで黙って悪かったな。それも含め、後で説明してやるから落ちつけ」
「う、うん」

慌てる響を落ち着かせたイサムは、この後、奏たちと共に車に乗り込み、特異災害対策機動部二課へと向かった。

# 第5話　特異災害対策機動部二課（通称　特機部二）

ノイズを装者の二人と協力し撃退し、響たちに正体を明かしたイサムは、奏の頼みで〝特異災害対策本部機動二課〟に向かう車の中で、窓の外をボーッと眺めていた。

そんなイサムに、奏が話しかける。

「なぁ、あんたさ」

「……なんだ？」

「名前…なんて言うんだ？」

「…不破イサム、好きな呼び方で構わない。」

「じゃあ…イサムって呼ばせてもらうわ。改めてあたしは天羽奏だ。よろしくな！」

「勘違いするなよ、俺はあんたらをまだ信用した訳じゃない」

イサムに自己紹介をしたが、信用していないことも告げられ、奏は頬を膨らませて拗ねた。

それから数十分後、車が止まり、イサムたちは車から出る。すると響は着いた場所を見て驚いた。

「ここって……私が通ってる学校⁉」

「ここが未来と響が通っているリディアンか…ほんとに広いな」

連れてこられた場所は、響と未来が通う私立リディアン音楽院であった。イサムはリディアンの施設内に入るのは初めてだったので広い敷地内に驚いている。

車から降りたイサムと響は、奏と翼のマネージャー兼二課のメンバーである緒川慎次を先頭に、リディアンの中へと入っていく。

だんだん歩き進めて行くと、本来は教師たちがいる中央棟まで来た。

そしてその中にあるエレベーターの扉が開き、全員中へと入る。

「危ないですから、手すりに掴まってください」

緒川にそう言われ、翼と奏、緒川は手すりに掴まった為、倣うよう

に響とイサムも手すりに掴まる。しかし見た感じ大きなエレベーターな為、イサムはそう危なそうな感じがしなかった。
「おい…何が危ないか説明をしてくれたって……」
イサムが説明を求ようとした次の瞬間、
―ギュイイイイイイイイン―!
「いいだろうがぁぁぁぁぁぁぁぁぁ⁉?」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ⁉」
突然、もの凄い勢いで急降下するエレベーターに、イサムと響が大声を出しながら驚いたのも無理はない。
それを見て、奏と緒川は苦笑いする。
「な、なんなんですか今の⁉」
「そりゃあ驚くよな?」
「驚くどころじゃねぇ!あんな急降下するなんざ誰が思うか‼?」
「僕たちの本拠地は地下にあるので」
「地下……ですか?」
「ええ。だけど、ここからは気を引き締めることよ。これから向かう所には、微笑みなど必要なくなるから」
「は、はい‼」
翼に言われ、響は気を引き締める。数分後、エレベーターが止まり扉が開く。
すると
―パン‼パンパンッ‼パン‼―
「ようこそ‼人類最後の砦、特異災害対策機動部二課へ‼」
エレベーターの扉が開いたのと同時に、クラッカーの音が大量に鳴り響き、パーティーでも開いたかのような雰囲気で、弦十郎と二課のメンバーがイサムと響を迎えた。
しかも、垂れ幕が用意されており、垂れ幕には『熱烈歓迎‼立花響さま&不破諌さま』と書かれていた。
迎えられた響とイサムは目をパチクリさせる。正気に戻ったイサムは緒川を見やった。
視線を向けられた緒川と奏は苦笑いし、翼は頭を抱える。

すると二課の中から白衣を着た女性、櫻井了子が携帯のカメラを構えて響に近づく。
「さぁさぁ、笑って笑って!!お近づきの印にツーショット写真♪」
「えぇ!??嫌ですよ!!手錠したままの写真だなんて、きっと悲しい思い出になりますよ!!　というかなんで私達の名前を知ってるんですか!?」
響の問いかけに大男は答える。
「我々二課の前身は、大戦時に設立された特務機関なのだよ。調査程度お手の物だ」
「はいこれ、返すわね」
科学者らしき女性職員が鞄を差し出した。それはまさに響が自分で破棄した彼女の鞄だった。
「あーッ！　私の鞄！　なーにが調査はお手の物ですか！　鞄の中身を覗いただけじゃないですかぁー！」

「イサムくん一緒に写真撮りましょ♪」
「すまないが……遠慮させてもらう」
「いいじゃない、こんな美人と写真を撮れるなんて滅多にないわよ？だから一緒に撮りましょう♪」
「遠慮する……美人なのは否定しないが、状況を整理する時間をくれ」
「あら……嬉しいこと言ってくれるじゃないの」
イサムの返答に少し驚きすんなりと諦めた了子は、響の手錠を外して一緒に写真を撮り始めた。イサムは状況を整理しながら考えていた。イサムがイメージしていた組織とはかけ離れていることに混乱しているのだ。状況を整理でき、周囲を見渡した後、イサムは二課の司令である弦十郎に歩み寄る。
「あんたがここの司令官か？」
「如何にも…俺がこの二課の司令官、風鳴弦十郎だ、君は不破諌君でよかったか？」
「ああ、まず一ついいか…垂れ幕の俺の名が漢字になっているが…名前の方は全て片仮名だ」

「なんと⁉?・そうだったのか!・すまない……それはこちらのミスだ、次からは気をつけよう」
　弦十郎は間違いにすぐに謝罪をした。イサムは素直に謝られるとは思わなかったので内心驚いている。
「それから…君には色々と聞きたい事があるんだが」
「その前に、響のことについて説明しろ。なんで響が天羽奏と風鳴翼と同じ物を纏った」
「いいだろう。では、自己紹介をするとするか。みんな集まってくれ」
　弦十郎がそう言うと、奏と翼、響と了子、緒川と二課のメンバーが集まってくる。
「それでは、改めて自己紹介だ。俺は風鳴弦十郎。ここ特異災害対策機動部二課の責任者だ」
「そして、私ができる女と評判の櫻井了子よ♪」
「僕は緒川慎次といいます。奏さんと翼さんのマネージャーです」
「改めて、天羽奏だ。ツヴァイウイングの1人で、【ガングニール】っていうシンフォギアってやつの装者やってんだ。んでこっちが」
「風鳴翼、ツヴァイウイングの1人で、【天羽々斬】を纏う装者だ」
「えっと、立花響です。私立リディアン音楽院高等科に通ってます」
「仮面ライダーバルカンこと…不破イサムだ。」

「あ、あの!・あれは一体なんだったんですか?・」
「貴方たちの疑問に答えるためには、2つばかりお願いがあるの。一つ目は今日の事は誰にも内緒。そしてもう一つは……」
　櫻井女史は響を抱き寄せ、色っぽく耳打ちする。
「取り敢えず、脱いで貰いましょうか」
「はいぃぃぃぃぃぃぃぃ⁉なんでぇっ!?」
　了子のぶっとんだ発言に響は顔を赤くして絶叫する。
「了子くん、もう少し彼女にわかりやく説明してくれ、我々も何故響く

んがシンフォギアを纏えるのか分からないんだ。だからまず、響くんの体を検査させてほしい」
「なるほど」
弦十郎の話に響は納得する。
「とりあえず、この後響くんには検査を受けてもらって、後日またここで検査の結果を話す。ということでいいかな？」
「はい‼分かりました‼」
響は二課の職員に連れられ、検査を受ける為、退室した。
「さて、響くんについては検査が終わった翌日にするとして……」
全員の視線がイサムに集中する。
「イサム君……すまないが君のことを説明してくれないだろうか？」
「……言える範囲でならば構わん」
「ありがとう‼ではまず、君のあの姿について教えてくれないか？」
「いいだろう……が、直接見せた方が早いかもな」
イサムはポケットから時計型のデバイスのようなものを取り出し顔が出るように表面を片手で回すしボタンを押す。
《バルカン！》
するとデバイスはイサムに溶け込むように身体を光に覆わせる。
《ショットライザー！》
イサムの腰に拳銃の付いたベルトが現れる。
「なっ⁉？拳銃とベルトが突然！」
周りは突然ベルトと銃の出現に驚いていた。
《バレット！》
イサムはプログライズキーを起動し展開させショットライザーに装身する。
《オーソライズ！》
《ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ　ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ　ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ》
イサムは銃をバックルから抜き前に構える。
「なっ⁉？待つんだ！こんな所で発砲は……」
周りはイサムに銃を向けられ慌て始める、しかしイサムはそれを気

にせずに
「変身」
《ショットライズ‼》
一発の弾丸が放たれた。弾丸は二課の職員達を綺麗に避けながらイサムの元に戻る。そしてイサムは弾丸を左拳を突き出し殴る。銃弾が弾け、装甲を足から順に身に纏っていく。
《シューティングウルフ!》
《Ｔｈｅ ｅｌｅｖａｔｉｏｎ ｉｎｃｒｅａｓｅｓ ａｓ ｔｈｅ ｂｕｌｌｅｔ ｉｓ ｆｉｒｅｄ.》

「一発の弾丸で……変身…した」
「と言うか……危ねぇじゃあねぇか！私らを撃ち殺す気か‼？」
奏が怒りながら声を上げ、それに釣られ職員達もうなずく。
「これが俺のルールだ…文句言うな」
「だからって、銃をこの場で発砲する馬鹿がいるか⁉？」
「それがバルカン…報告通り、近くで見ると狼のような見た目だな…」
イサムはショットライザーからプログライズキーを引き抜き変身を解除する。
「イサム君、すまないがそのデバイスを見せてもらっても構わないだろうか？」
イサムは無言でウルフのプログライズキーを弦十郎に渡す。弦十郎はプログライズキーをマジマジと見る。
「一見見ると、ただのデバイスにしか見えないな。展開してみても構わないか？」
「構わん」
承諾をもらい弦十郎はプログライズキーを展開しようとしたが展開しなかった。
「なっ…なんだこれは…開かないぞ？フンッ！」
力づくで展開しようとするがビクともしなかった。イサムは現在知らないが弦十郎は二課では霊長類最強と言われるほどの人物だ。その人物が小さなデバイスを展開できないと言うのだ。

「それは俺にしか展開できない。ある意味俺専用のアイテムだからな」
バックルにショットライザーを装着しベルトを外すとベルトとプログライズキーは粒子状となり消え時計型のデバイスに戻る。
「イサム君、君はそれをどうやって作ったんだ？」
「作ったと言うよりは……貰った物だ。信じるかはあんた達次第だ。ある日突然、家に銀色のオーロラが現れてな…そこから帽子をかぶった眼鏡の男――鳴滝――と名乗る男が現れ、そいつを渡された。」
半分嘘だか半分は本当だ。

イサムが転生してから一年後のことだった。バルカンとしてノイズと戦う日々を過ごしていたイサムは、何もない日は自宅でゆっくりしている。そんな時、突然部屋に銀色のオーロラが現れショットライザーを構え警戒した。
その中から人影が見えたかと思えば、中年の男が現れた。
すると男は「私は鳴滝、今から数年後、君は大きな戦いに巻き込まれるだろう。それは今と比べ物にならないくらいにね。これは私からの選別だ」
男は何も移されていないブランク状態のプログライズキー、そして形は違うがイサムが持っているバルカンのウォッチに似ていて他は携帯電話のような物が幾つか置かれた。
「何でお前がそれを？お前……いったい何者だ？」
ショットライザーを構え警戒しながらイサムは問い出す。
「私は君のような人物の味方だ。それから最後にもう一つ……ディケイド　には気を付けろ、奴は全てを破壊する世界の破壊者だ……健闘を祈っているよ不破イサム君」
「なっ⁉？・待て！」

男は銀のオーロラカーテンに入り込み、この場から消えてしまった。

「…と言うわけだ」
イサムはその時にファイズフォンχとコダマスイカアームズ、タカウォッチロイド、ブランク状態の幾つかのプログライズキーをもらった。転生の件は流石に伏せたのだ。
「成る程、にわかに信じられない話だが…君がそのデバイスを持っている時点で信憑性は高いな」
「…鳴滝、イサム君にバルカンの力を託した男……一体何者かしらね」
了子は鳴滝と言う男について考察し始める。
「不破……ディケイドとは何だ?それに、世界の破壊者…不穏な感じがするのだが」
翼は話に合ったディケイドが気になったのかイサムに詳細を聞く。
「詳しい詳細は知らん…知っているのはおそらく鳴滝と言う男だけだな」
イサム自身、ディケイドの事は何もわからじまいだ。
しかしイサムは近い未来、世界の破壊者と邂逅することになる。

「不破イサム君」
弦十郎は、真剣な顔でイサムを見る。
「君に、これから我々とノイズを撃滅するのに協力してほしい‼」
「……」
「もちろん、バルカンについては決して口外しない‼だから頼む‼協力してくれ‼」
「……」
司令自ら頭を深く下げている姿にイサムは言葉が出なかった。
「(俺は…何を勘違いしてたんだろうな、政府の連中はみんな欲望まみ

れの連中と思っていたが……でも、こいつらは違う、特に司令官の目。守りたいのは機密じゃない、人の命。そう思わせるような感覚、信用してもいいかもな……こいつらなら）」

イサムの答えはもう決まっていた。

「いいぜ…あんたらに協力してやる」

「っ⁉？いいのか⁉」

「ああ……お前達を信じることにした。だがバルカンについては絶対に口外はするなよ？」

「ああ‼絶対に口外しない‼ありがとう‼」

イサムは弦十郎に協力することを約束する。

イサムは弦十郎に手を出す。

「改めて不破イサムだ。今を持って俺は二課の仮面ライダーとして、お前達と協力する。これからよろしく頼む、風鳴司令」

「こちらこそ、よろしく頼む…頼りにしているぞ、イサム君」

弦十郎も手を出し二人は握手を交わす。

その後イサムは、弦十郎から通信機を受け取り、イサムは響に事情を説明した後、自宅へと帰っていった。

# 第6話　相応の覚悟と新たなる力

イサムが特異災害対策機動部二課に正式所属して翌日の夕方、イサムは弦十郎に呼ばれ、バイクに乗ってリディアンに向かっていた。
内容は、響が纏ったガングニールの正体が分かったということだ。
しばらくして、リディアンの校門前に到着すると、奏が校門前に待っていた。
「よっ、待ってたぜ……って、お前…その服装どうした？」
イサムの衣装は黒のスーツ姿だった。
「ああ…この格好か、俺も正式に二課の一員になったからな。流石に身嗜みはしっかりしておかないとな、それより、響が纏っていたアレの正体が分かったと聞いてきたんだが？」
「ああ…そのことについて二課で説明するみたいだぜ、付いてきな」
「…了解だ」
イサムは奏の指示に従い、着いていく。
先日同様、エレベーターに乗り地下へと下り、メディカルルームへ行くと、すでに響と弦十郎、緒川と翼、オペレーターの友里あおいと藤尭朔也がいた。
「旦那、イサム連れてきたぜ」
「ご苦労。わざわざ来てもらってすまないなイサムくん。本来なら此方から出向くのが礼儀なのだが」
「そちらの事情はあらかたわかっているつもりだ…気にしないでくれ、それで、響が纏った正体はなんだ？」
「ああ。アレは……シンフォギアだ」
「シンフォギア？」
「……二人が纏っている姿は何度か見たが…シンフォギアって言うんだな」
弦十郎の言った言葉に響は首を傾げる。それからイサムと響は、了子からシンフォギアについて説明を受ける。
弦十郎の視線を受けて翼と奏は首元から一つのネックレスを取り

出す。
　その鎖の先には赤い金属の楕円形の飾りがついており――
「翼が持つのは第一号聖遺物『天羽々斬』、奏くんが持っているのは第3号聖遺物【ガングニール】だ」
「セイ…イブツ……？」
　聞き慣れない言葉に響は首を傾げる。
「聖遺物とは、世界各地の伝承に登場する現代では製造不可能な異端技術の結晶こと。多くは遺跡から発見されるんだけど、経年による破損が著しくてかつての力をそのまま秘めたものはホントに希少なの」
「この『天羽々斬』、奏くんの『ガングニール』も刃の欠片のごく一部に過ぎない」
　響の疑問に答える様に了子と弦十郎が説明する。
「欠片にほんの少し残った力を増幅して解き放つ唯一のカギが特定振幅の波動なの」
「トクテイシンプクノ…ハドウ……？」
「つまりは〝歌〟、歌の力によって聖遺物は起動するのだ」
「歌……？」
　弦十郎の言葉に響は一瞬考え、
「そうだ……あの時も胸の奥から歌が浮かんできたんです」
「うむ……」
　響の言葉に神妙に弦十郎が頷く。
「歌の力で活性化した聖遺物を一度エネルギーに還元し、鎧の形に再構成したのが、翼ちゃんと奏ちゃん、響ちゃんが身に纏うアンチノイズプロテクター、『シンフォギア』なの」
　弦十郎は座っていた椅子から立ち上がる。
「聖遺物を起動させ、『シンフォギア』を纏う歌を歌える僅かな人間を我々は『適合者』と呼んでいる。それが翼や奏くんであり、君であるのだ！」
「どぉ～？あなたに目覚めた力について、少しは理解してもらえたかしら？」
　響に向けて弦十郎に続いて了子も笑顔で訊く。

「質問はドシドシ受け付けるわよ～？」
「……あの！」
「ど～ぞ響ちゃん！」
「……全然わかりません！」
「だろうね……」
「だろうとも……」
苦笑いで言う響に友里と藤堯が頷く。
「い、いきなりは難しすぎちゃいましたね……」
了子も優しく笑いながら頷く。
「だとしたら、聖遺物からシンフォギアを作り出す唯一の技術、『櫻井理論』の提唱者が、この私であることだけは、覚えてくださいね？」

「櫻井さん……質問いいか？」
「何かしら？」
説明中、無言だったイサムが口を開いた。
「先程の話を聞く限り、シンフォギアを纏うには風鳴翼と天羽奏が持つペンダントが必要である、と。だったら何故響はペンダントも無いのにシンフォギアを纏えた？」
「そ、そうですよね‼なんであたし、シンフォギアを纏えたんですか？」
「いい質問ね♪じゃあ、コレを見て」
イサムと響の疑問の声を聞いた了子は、1枚のレントゲン写真を映像に出した。
そのレントゲン写真は響のものであった。
「心臓付近に複雑に食い込んでいるため、手術でも摘出不可能な無数の破片。調査の結果、第3号聖遺物【ガングニール】の破片だと判明したわ」
了子の言葉に、イサム以外のメンバーが目を見開いていた。
「(やっぱりそうだったか……響の体の中…正確には心臓付近に残っていたガングニールの破片が響に影響を及ぼしたのか)」
未来から話を聞いた時は無理に摘出すると危険だと聞いた為、放置

状態になっていた。その時の医者からは放置しても支障はないとのことだった。
「……あの、この力のこと、やっぱり誰かに話しちゃいけないんでしょうか？」
　弦十郎に聞く響であったが、弦十郎は首を横にふる。
「君がシンフォギアの力を持っている事を何者かに知られた場合、君の家族や友人、周りの人間に危害が及びかねない。命に関わる危険すらある」
「命に……関わる……‼」
「（さて……問題はそこだ。未来は俺がバルカンである事は知っている。それに響は俺がバルカンである事を知ったと同時に、機密事情を知ることになった。未来に何て説明すりぁいいんだよ）」

　弦十郎の話を聞いて、衝撃を受けたように響は固まる。しかしイサムは未来の事を考えていた。
　実を言うと未来はイサムがバルカンである事は既に知っている。バレたのは去年の事だ。

「俺たちが守りたいのは機密などではない。人の命だ。そのために力の事は隠し通してもらえないだろうか？」
「響ちゃんに秘められた力は、それ程大きな物であることを分かってほしいの」
　弦十郎と了子に言われ、自分の周りにどんな影響をもたらすか響は理解する。
　その響に、弦十郎は頼み込んだ。
「日本政府特別災害対策機動部二課として、改めて頼みたい。立花響くん。君の宿した力を対ノイズ戦に役立ててくれないだろうか？」
「……はい‼分かりました‼」
　弦十郎の頼みに、響は躊躇なく返事する。その響に対し、イサムが口を挟む。
「響……お前、それが何を意味するのか分かっているのか？」

「誰かを自分の力で助けられるってことですよね？これって凄い人助けですよね‼私にしかできない人助けができるんですよね‼」
「違う！…俺が言いたいのは……」
ヴヴ――――――ッ!!ヴヴッ――――――ッ!!
「ッ⁉警報⁉」
「こちら友里‼……はい……分かりました‼司令‼ノイズが出現したそうです‼」
「分かった‼翼‼奏くん‼現場に急行してくれ‼」
「了解‼」
警報が鳴り、ノイズが現れたことを聞いた弦十郎は翼と奏に現場へ行くよう指示を出す。そして弦十郎はイサムに視線を向ける。
「イサムくん、君も現場に急行してもらっても構わないか？」
「了解だ」
応じたイサムは、翼と奏の後を追ってメディカルルームを出て行こうとするとその時、
「あの、私も行きます‼」
突然響が、自分も行くと言い出した。
「しかし！」
「私の力が誰かの助けになるんですよね‼シンフォギアかイサムさんのバルカンの力でしかノイズを倒せないんですよね‼だから行きます‼」
「ダメだ」
イサムは響が現場に行くのを拒否した。
「なっ…何でですか⁉？」
「今のお前が行っても、足を引っ張るだけだ。大人しく待ってろ」
「で…でも！私の力が誰かの助けになる事ができるなら私も戦いたい
「ふざけるな‼？」……っ⁉？」
イサムは響に近づき、怒鳴りながら胸ぐらを掴む。いきなりのことで職員達はイサムを止めようとするが、弦十郎が職員を静止させる。

「何が助ける事が出来るだ!!?今のお前じゃ足手纏いどころか、何もわかっていない!!?いいか!力を持つってのはな…それ相応の覚悟が必要なんだよ!力を持つ意味をわかっていない今のお前が…人を助けられるわけがないだろ!」
　イサムは言い終わると掴んでいた手を離し響の両肩に手を置く。
「いいか響……　その力は確かに…誰かを守れる力だ。だが同時に、お前や俺、あの二人も使い方を誤れば…相手の命を奪いかねない物だ。」
「……あ」
　響はイサムに言われ気づいたのか顔を俯かせる。
「響…俺は、お前が決めた事は止めるつもりはない。でも…今回は違う、下手すると死んでしまうかもしれない。戦場ってのはそう言うもんだ。あの二人も相応の覚悟を持って戦ってんだ。だから今は……大人しく待っててくれないか?」
　イサムは優しく響に言う。響は顔を上げ納得した表情をしていた。
「ごめんなさい…私、何もわかってなかった。気づかせてくれてありがとう…イサムさん」
「……わかればいいんだよ…それと、さっきは悪かったな…いきなり乱暴な真似して」
　イサムは響の頭を撫でながら言う。響はイサムに撫でられながら気持ち良さそうな表情だった。
「…って!ちょっと!今はやめてくださいよイサムさん!」
　響は顔を赤くし恥ずかしがりながらイサムの手をどかす。しかし実際は満更でもない様子だった。
「悪い…つい、俺はそろそろ行く……見ててくれ、俺達の戦い」
　イサムはメディカルルームから出て現場に向かう

　数分後、　先に向かった翼と奏はシンフォギアを纏ってノイズと戦っていた。
「最近やけにノイズの出現が多いな。数も増えてるような気がするし

……な‼」
「ええ、そうだ……な‼」

翼と奏は、次々とノイズを倒していく。
その2人に、背後から飛行型のノイズが加速し近づいてきていた。
しかし
バキュン！
飛行型ノイズは撃ち落とされ炭化する。発砲音がした方を見ると
イサムがショットライザーを構えノイズを撃ち落としたのだ。
「イサム⁉／不破⁉？」
イサムは一歩前に出てプログライズキーを左手に持つ。

「ノイズ共は……一匹も残らずぶっ潰す」
《バレット！》
親指を使い力尽くでキー形状にして展開する。

《オーソライズ！》
プログライズキーをショットライザーに装身させる。しかし、もう
一体の飛行型ノイズがイサムに攻撃を仕掛けてきた。
「変身‼……《ショットライズ‼》…ッ！」
イサムはノイズの接近攻撃をバク宙で躱す。
「はあっ！」
そして着地し、放った弾丸を左拳で殴る。
《シューティングウルフ！》
イサムはバルカンに変身した後、即座に攻撃を仕掛けたノイズを撃
ち落とし奏達の元に近づく。

「サンキュー‼」
「すまない、助かった‼」
「遅くなってすまない、状況は？」

「私達は問題ない、ただ…数が多くてな」
「だからと言って…ここで引き下がるわけにはいかない」
「ふっ……そうか」
　イサムは仮面越しだが少し笑ったのだ
「？、なんかおかしなこと言ったか……私ら」
「いや……お前らとこうやって一緒に戦うのは初めてだからな…心強いと思っただけだ」
「確かにそうだっけ……共闘して戦う事はあったが、同じ仲間として戦うのは初めてだったな」
「そうね……不破は今まで、私達の同行を拒否して逃げてばかりだったな…今となっては懐かしく思う」
「そうだな……当時の俺は、お前たちの事は全く信用しなかったからな、だが…今は違う、こうやってお前達と肩を並べて戦うんだ、準備はできてるか？奏、翼」
「「おう‼／ああ‼？」」
　イサムの言葉に返事をした奏と翼は、イサムと共に駆け出そうとしたその時、奏と翼のシンフォギアのペンダントとイサムの持っていた二つのブランク状態のプログライズキーが光りだしたのだ。イサムはホルダーにあったプログライズキーを手に取る。
「なっ…なんだこりぁ⁉？」
「なっ！一体何が？」
「何が起こってるんだ……？」
　するとペンダントから球体状の橙色と蒼色の光が飛び出す。そして光の球がブランク状態のプログライズキーに触れると、正規のプログライズキーになっていた。
　橙色と蒼色で半々のプログライズキーになっていた。絵は二人の横顔があり槍と剣が映っていた。
「それはいったいなんだ…不破？」
「この絵……もしかしてあたしらのアームドギアと顔か⁉？」
「俺にもよくわからん……試してみるか、新たな力」
《スピア！》

イサムはウルフのプログライズキーを外し、橙色のプログライズキーを起動展開させショットライザーに装身する。
《オーソライズ！》
《ｓｏｎｇ　ｒｉｄｅｒ　ｓｏｎｇ　ｒｉｄｅｒ　ｓｏｎｇ　ｒｉｄｅｒ》
「なっ……なんだ、ソングライダー？仮面ライダーじゃなくてか…まぁいい」
プログライズキーを装身した時の待機音が変わり少し驚くも、バルカンはすぐさまショットライザーを構えトリガーを引く。
《ショットライズ！》
橙色の弾丸が放たれた。戻ってきた弾丸をイサムはいつもどおり殴って弾けさせる。
そして無数の装甲が現れ奏が纏うガングニールのアーマーへと変わり、バルカンの姿に上乗せする様に装着され、複眼が橙色へと変わる。
《ランス　オブ　ガングニール♪》
《Ｃｒｏｉｔｚａｌ　ｒｏｎｚｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｚｉｚｚｌ》
バルカンの姿は奏のガングニールのアーマーをウルフの状態から上乗せした感じで、右手には奏の装備と酷似したアームドギアを握っていた。
「ええ⁉？あたしと同じガングニールかそれ‼」
「成る程……こうなるのか。よし、改めて気を引き締めて行くぞ……奏、翼」
「あっ、ああ‼」
「しょ……承知した！」
二人は戸惑いもあったがノイズの大群に突っ込む。
「はぁあああああ‼」
バルカンはアームドギアの槍を振るい、ノイズを貫き倒していく。まるでそれは使い慣れたような動きだった。

「チッ、数が多いな……ん？なんだ…これは？」
イサムが持っていたガングニールアームドギアを見ると何やらかざすようなスペースがあった。
「まさか……こいつを使えるのか？」
《ファイヤー！》
プログライズキー起動させアームドギアにかざす。
《プログライズキーコネクトオン》
すると槍は炎を発した。槍は炎を纏い、炎槍になり燃え盛る。
「うぉっ⁉？成る程……プログライズキーの特性を発揮できるのか、この槍」
バルカンは翼と奏が連携しノイズを倒している姿を確認する。残りのノイズは二人に集中しているようだった。
「よし……一気に決める‼？」
炎を纏った槍をノイズ達に構える。
「奏！翼！その場から高く飛び上がれ！でかいのを放つ！」
「「ッ！」」
二人はバルカンの指示に従い高く翔び上がる
「纏めて灰になりやがれ……ノイズ共‼？」
バルカンは槍を突くように振るうと、一直線状の炎槍が放たれる。
《ファイヤー！ランスオブフィニッシュ‼？》
直撃したノイズは一瞬にして灰となり全滅した。周りにノイズをいないことを確認したバルカンは変身を解除する。
するとシンフォギアを解除して元の姿に戻った二人が駆け寄る。
「スッゲーなイサム！あたしのガングニールじゃあんな事できねぇーよ！」
「俺も正直驚いている…まさかここまでの力を秘めているとは思わなかった。」
イサムはガングニールのプログライズキーを手に持ち見つめる。
「確か……もう一つあったわよね？と言う事は、もう一つは私の天羽々斬か？」

「おそらくそうだろうな……ブランク状態だったプログライズキーがお前達のシンフォギアに反応を示した。何故だ？」
「そんなのなんでもいいじゃねぇのか、私らの絆が深まったって事だろ？」
突然翼に腕を回し言ってきた奏は笑顔で言う
「確かに…そうかもしれんな、心当たりはある」
翼は奏に言われ絆が深まった瞬間を思い出す。
「そう言われると、なんか恥ずいな」
イサムは頭をかきながら言う。すると、

―ギュルルルルル―
「「ん？／え？」
イサムと翼は音の出した人物に視線を向けた。
「あ、あはははは、悪い、かなり動いたから腹減っちまって／／／／」
奏はお腹を鳴らしながら、恥ずかしそうに答える。
「もう……奏ったら」
「お前という奴は……」
二人は奏に呆れの視線を向ける。
「しょ、しょうがないだろ⁉腹が減るのは人として普通だろ！」
イサムは耳に付いている無線に手を当て二課に連絡する。
「こちらイサム、ノイズは無事に倒した。ああ……それなんだが、報告は後で構わないか？約一名腹を空かせてる奴がいるからな、ああ…すまない、感謝する」
イサムは無線を切り二人に顔を向ける。
「お前ら…後は職員に任せて飯食いに行くか？」
「えっ！マジか⁉？」
「大丈夫なの？先に司令に報告しないで」
「司令からは許可はもらっている…親睦も兼ねてだ、俺の奢りでな」
「マジか⁉ありがとうイサム！」
「いいの？食事まで奢ってもらって」
「生憎…貯金はある方なんでな、問題はない」

事実かなり大金を持っているのは内緒だ。それが神様からの贈り物なんて信じるわけないからな。
「じゃあ…お言葉に甘えさせてもらおう」
「よし……じゃあ行くか」
「おう♪」

イサムと奏、翼はそのままままま、飲食店へと向かった。

# 第7話　剣のウルフと諸刃の剣

イサムと響が特異災害対策機動部二課に協力するようになって、1ヶ月――響はあの戦いの後、何かを決意したようないい顔つきになった。響は、今言える自分の覚悟をイサム、ツヴァイウィングに伝えた。そして響はイサム達に戦い方を教えて欲しいと頼んできたのだ。

奏は、あの惨劇が原因で響をこちら側に巻き込んでしまったことに負い目を感じ、余り乗り気ではなかったが、翼は逆に先輩として彼女を鍛える事に意気込んでいた。イサムは響が決めた事を止めるつもりはなかったので、響の意思を尊重した。しかしイサムは装者ではないためシンフォギアの戦い方は教える事はできない。その為、二人に装者としての戦い方の指導を任せた。

ところ変わって一角にある休憩スペースにて、司令の弦十郎がエージェントの1人である緒川と仮面ライダーバルカンであるイサムと共に、コーヒー片手に雑談に興じていた。

話題は主に3人の装者についてだ。

「どうだ？　最近のあの3人は？」

「悪くない感じだと思います。奏さんは最初は彼女に負い目がある感じでしたが…今はいい感じになっていると思います。何故か翼さんは彼女を鍛える事に意気込んでるみたいです」

「ははっ、そうか。翼に気に入られるとは、響くんも苦労するだろうな」

「響ならきっと大丈夫ですよ。最近はやっとシミュレーター訓練で型になってきてますし。」

最初の響の動きは酷いにも程があった。敵を殴ると言う動作にしたって素人感丸出しで見ていて危なかった。あの時、怒鳴ってでも止めて良かったとイサムは思った。

その為、イサム、奏と翼は極力響を実践に出すことは控え、今は戦い方を叩き込むことに専念した。未だアームドギアさえ出せていな

い響には、危険と隣り合わせの実戦はまだ早すぎる。
装者としての戦い方は二人に任せ、武術は現在イサムが教えている。二人は武術はそれなりにできるが戦いではほぼ武器を使っている為、イサムよりは劣る。イサムは近接や遠距離をこなす事ができるバランスタイプなのだ。
響は筋が良かったのか覚えが早い、学力に関してはアレだが…体で覚えるのは得意みたいだ。
時折何故か訓練中どうしても密着する際に響が顔を赤くする時があったのは謎だが…なんだったのだろうか。
ピロリン♪
とイサムのスマホから着信音が鳴った。相手は未来からだった。
（ここからはメールでのやりとりになります）
（未来）イサムさん、今大丈夫ですか？
（イサム）大丈夫だが…どうした？
（未来）今日もしよかったら響と一緒に流れ星見に行きませんか？
（イサム）流れ星？確かこと座流星群だったか？
（未来）はい、それでもし大丈夫でしたらイサムさんも一緒にみませんか？
（イサム）うーん、こっちも都合があるからな、いけなくなった時は連絡する。
（未来）わかりました。響にはそう伝えておきます。それと…最近ノイズが頻繁に現れているみたいですけど大丈夫ですか？
（イサム）ああ今の所大丈夫だ。心配すんな、無茶はしねぇ

（未来）分かってはいますけど、やっぱり不安なんです。もしイサムさんに何かあったらって思うと。

（イサム）ありがとな…心配してくれて、その気持ちだけでも充分さ

（未来）わかりました。無事に帰ってきてくださいよ。それと最近響の様子がおかしいのですが、イサムさん…何か知っていますか？

（イサム）いや、知ってはいるが、こればかりは響本人から聞いてくれ、俺が口出し出来るような内容じゃないからな、ただ…響の事を責めないでやってくれ、あいつは嘘をつくのは下手だが、嘘をつく時は誰かのためと思っての嘘だからな

（未来）わかりました。いつか響から言ってくれるのを待ちます。イサムさんも怪我には気おつけてください。

（イサム）おう……わかった。それじゃあまた

そしてイサムは未来とのやりとりを終えスマホの画面を切る。未来はイサムがバルカンである事は知っているのでノイズが現れる度戦っているのは知っている。

その為ノイズが現れるたんびに未来はイサムの事が心配でならない様子だった。一時期無茶をして怪我をした時たまたま未来がイサムの家に訪ね酷く動揺して手当てをしてもらい未来に凄く怒られた。あの時の未来はスゲー怖かったよ。年下相手にだよ、笑っているのに笑っていない笑顔で俺をみていた。

「クシュン！」

「いきなりどうしたイサム君、風邪か？」

「風邪薬、用意しましょうか？」

「いや……誰か俺の事を噂していたような気がして」

鼻を摩りながら、イサムはそう告げた。心配した弦十郎と緒川は首を傾げる。

そんな装者の3人は現在二課本部施設のシミュレーターでの訓練を終え、スポーツドリンクを手に取り水分を補給している。

「ふぃ～。どうだ響、少しはギアの扱いにも慣れたか？」

「あはは、正直まだ分からない事だらけですけど、アームドギアなんか、全然出せる気配もありませんし……でも、いつかお2人について行けるように、私…頑張ります！」

「よくぞ言ったな…立花。なら、次からはもっと厳しく鍛えてやろう。泣き言は受けつけないからな」

「えぇっ!?」

「あっはっはっ！　墓穴掘っちまったね、響。ま……安心しな。あたしとイサムも付き合うからさ」

笑いを交えながら談笑する三人の様子から容易に窺えるが、3人の仲は良好である。

当初こそ、奏は諸々の責任感から彼女を巻き込むことに難色を示していたが、響なりの強い覚悟を聞き、仲間として迎え入れることが決まってからは一転して先輩として甲斐甲斐しく面倒を見ている。

また翼は翼で、奏と同じガングニールを纏っているからか響をそれに相応しい戦士に育て上げようと気合を入れて接している。彼女の扱きは厳しいし、響は口では何度も弱音を吐いていたが、覚悟は本物だった。翼に課せられたハードな訓練にも耐え続けている。

奏がそれとなく緩衝材となって、適度に訓練の手を緩めさせている事も理由の一つかもしれない。

組んで間もないが装者3人はチームとして割と纏まりつつあった。

「話、変わるんだけどさ、お前……イサムの事どう思ってんだ？」
「はい？どう…とは？」
突然の奏の質問に響は首を傾げる。急に問いかけられた質問に響はどう答えたら良いかわからなかったのだ。
「ワリィ、わかりやすく言うと……この際はっきり言う、響は……イサムの事が好きなのか？」
ハッキリと響に告げると響の顔は茹で蛸のように一瞬にして赤くなる。
「な、にゃに言っているんですか奏さん⁉？」
「呂律がしっかりしていないぞ……立花」
翼は響のわかりやすいリアクションに呆れながら言う
「その様子だと当たりみたいだな。どうもイサムといる時は笑っていることが多かったから……もしかしたらと思ってだんだ。」
「確かに……立花は不破といる時は、私達といる時以上に笑っている事が多いな」
翼も奏に同意する。響の表情は笑顔が多いが、特にイサムといる時は表情の変化は周りが気付くくらいかなりある。
「う～、まさか…お二人にバレるなんて、そんなに私ってわかりやすいですか？」
「ああ／ええ」
「お二人揃って即答ですか⁉？そこまでわかりやすいだなんて」
響は二人に即答され少し落ち込み気味になる、しかし響の性格上、余り隠し事をするのは得意ではない。ほんの数ヶ月の付き合いでも二人は充分に響の性格を理解している。

ｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉ

突如として翼の無線機にコール音が鳴った。
「ッ⁉　はい、こちら翼」
素早く通話に出る翼に、無線の向こうに居る弦十郎はノイズ出現の報を知らせた。

『翼、ノイズが出現した！その場に全員居るか？』
「はい全員います。、不破は――」
『イサム君には先にポイント1に向かっている。三人も準備が出来次第出撃してくれ。』
「了解、二人とも…分かってはいるとは思うけど、ノイズが現れた。準備が出来次第すぐに出撃する。立花、今回は私と共に行動するように。」
「わかりました！」
翼は場所を確認した後、通信を切り二人に指示を伝え行動を開始する。今回響は翼と共に行動する。今の響はまだ一人では任せられないので必ず誰かが一緒でなければならない。

数十分後、イサムはノイズが現れたポイント1のノイズを既に全滅させていた。
「こちらイサム、ポイント1のノイズは全て倒した。」
『ご苦労、連戦になると思うが…響くんが今、別のポイントで一人で戦っている状態だ。救援を頼めないか』
「了解…直ぐに向かう」
弦十郎から話を聞いたイサムは響が戦っている地下鉄内へ向かう。すると、中では響が一人で必死にノイズと戦っていた。
「響!!」
「イサムさん!?」
「今すぐしゃがめ!!」

《フルチャージ！》
「えっ？うわ⁉」
「ハァッ‼」
《カバンストラッシュ！》
　バルカンはアタッシュカリバーを手に持ち、響にしゃがむように告げて、斬撃を放つ。響がしゃがむのと同時に響の後ろにいたノイズを斬り裂いた。
「イサムさん、すみません‼助かりました‼」
「よく一人で持ち堪えたな、響‼動きはかなり良くなってきてるぞ！」
「はい‼でも、お前たちの……お前たちのせいで‼未来との約束がぁあああ！！」

「なっ⁉響⁉」
　急に響の様子が変わり、まるで獣のようにノイズを撃退していく。イサムは響の変わりように、驚きを隠せなかった。
　イサムは先程響の発言にあった「未来との約束」から、未来とのメールでのやり取りを思い出し、流れ星が見られない事に怒っていると直ぐに理解した。そして響は、一体のノイズを追いかけていった。
「おい！待て響⁉どこに行くつもりだ⁉？単機行動はよせ！」
　響を追いかけようとするバルカンだったが、ノイズたちに妨害される。

「チッ！邪魔だ‼」
　バルカンは左手にアタッシュカリバー、右手にショットライザーを持ちノイズを倒していくが囲まれてしまい、ショットライザーで撃っても減る気配もない。

「この状況じゃ、今の形態ではきついな……だったら！」
　バルカンは、ホルダーから蒼色のプログライズキーを取り出した。
「翼……お前の天羽々斬の力、使わせてもらうぞ‼」
《ブレード！》

《オーソライズ！》
《ｓｏｎｇ　ｒｉｄｅｒ　ｓｏｎｇ　ｒｉｄｅｒ　ｓｏｎｇ　ｒｉｄｅｒ》
《ショットライズ！》
　バルカンは天羽々斬のプログライズキーを起動させ、ウルフのプログライズキーを外し天羽々斬のプログライズキーを装身しショットライザーを構えトリガーを引く。そして戻ってきた蒼色の弾丸を殴らず、持っていたアタッシュカリバーで斬り裂いた。
《ソード・オブ・ハバキリ！》
《Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ》
　バルカンの姿から、ガングニールバルカンと同じように、天羽々斬のアーマーを上乗せし複眼は蒼色に変わる。右手には刀のアームドギアを握っている。
「ハァァァァァァ‼」
　バルカンは刀のアームドギアで、次々と斬り裂いていく。その動きはまるで侍の如し。
　ノイズに囲まれていたバルカンはすぐに形成を逆転させた。
「ぶった斬る！」
《ファング！》
《Ｐｒｏｇｒｉｓｅ　ｋｅｙ　ｃｏｍｆｉｒｍｅｄ．　Ｒｅａｄｙ　ｔｏ　ｕｔｉｌｉｚｅ》
《シャークズアビリティ！》
「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼」
　イサムの持っていた天羽々斬アームドギアにプログライズキーを装身して、そして牙状のエネルギーブレードが形成される。そして円を描くように牙状の刃を振るう。
《ファング！ブルースラッシュ！》
　噛みちぎられたようにノイズは斬り裂かれ炭化する。バルカンの周囲にはノイズはいない。先程の攻撃で全滅したようだ。
「今ので最後か。こちらイサム、司令部、響の現在位置は？」
　イサムは周囲にノイズがいないのを確認し無線で響のいる位置を

確認する。

『イサムさん、友里です‼今すぐ響さん達の所に向かってください緊急事態です‼』

「了解！直ぐに向かう」

イサムはあおいの指示に従い、響の元に向かう。地下で戦っていた為、地上は辺りは暗くなっていたが、響と翼を視認することはできた。

そして翼は、対峙するように1人の少女と向かいあい、相手の少女を見て驚いていた。

「ネフシュタンの鎧⁉」

「へぇ……てことは、この鎧の出自知ってんだ？」

「2年前、私達の不始末で奪われた物を忘れるものか‼」

「（ネフシュタンの鎧？2年前？…まさか、あのライブの時に関係している物か？）」

翼の言葉を聞いて、イサムは2年前のライブのことを考える。すると翼は、アームドギアである刀を構えた。

「やめてください‼翼さん‼相手は人です‼人間です‼」

「「戦場で何をバカなことを⁉」」

響が翼と少女の戦いを止めようとするが、2人は同じ言葉を言い放ち、やめようとしなかった。

「……ッ⁉どうやら、あなたとは気が合いそうね？」

「だったら、仲良くじゃれあうかい‼」

そう言って少女が翼に向かって飛び出す。

だが

《ショットライズ！》

「ッ⁉ちぃっ⁉」

《シューティングウルフ！》

イサムは通常形態に戻り、放った弾丸を、少女に向かって放った。

それに気づいた少女は後ろへ後退し、弾丸を避けた。

「テメェがバルカンか」

「お前……俺のことを知ってるのか？」
「まぁな」
「イサム‼あの者は私が相手する‼」
「了解だ。だが気を付けろ、あの少女もだが、あの纏っている鎧……お前達が使っているシンフォギアとは一味違うぞ」
「心得た‼」
「はんっ‼ぶっ飛ばしてやる‼その前に…お前ら二人はこいつらが相手だ！」
　そう言った少女は、杖のような物を取り出した。そしてその杖から光が放たれ、その光がノイズへと変わった。
「なっ⁉ノイズを生み出した⁉」
「チッ、厄介な事を……響、あいつは翼に任せて…俺達はノイズを倒すぞ」
「は、はい‼」
　俺と響は翼の邪魔をさせないように、ノイズを倒していく。響を一人で戦わせるのも不安だったが上手く戦えている。訓練の成果が出ている証拠だ。
「（クソ！数が多いな…響は今の所問題はないが出来るだけフォローはしてやらないとな。それに…あいつの持っていた杖はいったいなんだ？）」
　バルカンはアタッシュカリバーを左手に、ショットライザーを右手に握る。
　バルカンはショットライザーでノイズを撃ち抜きながら接近しアタッシュカリバーでノイズを斬り裂く。

「ハァッ！」
　ノイズはバルカンの一閃により炭化する。イサムは辺りを見渡すと一部のノイズが一箇所に集中している。
「まとめてぶっ潰す！」
《バレット！》
　ショットライザーからエネルギーが蓄積され、イサムはトリガーを

弾き放つ。すると複数のエネルギー体の狼がノイズ達を噛みちぎり炭化させる。そしてバルカンはもう一度トリガーを引き、銃口に青いエネルギーの弾を凝縮させて放つ。
「ふんっ！」
《バレットシューティングブラスト！》
　放たれた弾丸は残ったノイズを一掃する。そしてバルカンはすぐに別方向にいるノイズに向けショットライザーをバックルに装着する。
《チャージライズ！》
《フルチャージ！》
《Ｐｒｏｇｒｉｓｅ　ｋｅｙ　ｃｏｍｆｉｒｍｅｄ．　Ｒｅａｄｙ　ｔｏ　ｕｔｉｌｉｚｅ》
《ウェアウルフズアビリティ！》
　アッシュカリバーをカバン状態に戻し再びブレード状態にした後、ショットライザーからウルフのプログライズキーを抜きアタッシュカリバーに装身させる。
　そして刀身は青いエネルギーが蓄積される。バルカンはアタッシュカリバーのトリガーを引き、一気に振るう。
「ハァ‼」
《シューティングカバンダイナミック！》
　無数の青い斬撃が放たれ直撃したノイズは斬り裂かれ炭化する。
「よし、こっちはあらかた片付いた…次は」
「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌ　Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅｌ　ｂａｒａｌ　ｚｉｚｚｌ――」
「な、なんだ、歌…なのか？あいつらが戦っている際の歌とはまるで違う」
　今まで聴いていた歌とはまるで違うことに混乱したイサムは、歌声の主に目を向ける。歌っていたのは、翼だった。

「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ
ｅｄｅｎａｌ　Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅ
ｅｌ　ｚｉｚｚｌ　――」
すると辺り一体の空間が、半球状をした紫色のフィールドに覆われる。
翼は刀を納め、ゆっくりと少女へ近づいて行く。
鎧を纏った小女は縫い止められたように動けない様子だった。身体を動かそうと藻掻く少女へと、まるで抱擁と共に口付けを交わすように翼は密着する。
翼は最後の一節を唄いきった時、シンフォギアから放たれた圧倒的なエネルギー波が、翼中心に、その場にいた全てを吹き飛ばした。
「う、うわあああああーーーーッ!?」
「あっ……がっ、はっ……」
ほぼゼロ距離で食らい、何本もの木にぶつかりながら後方へと吹っ飛ばされる。
公園の池の真ん中に置かれた岩にぶつかってようやく、少女の身体は浅い水の中へと落ちた。
「ぐっ……ああッ……！うぐっ……がっ……ううっ……！」
全身を鋭い痛みが駆け抜ける。鎧に備わった自己再生能力だ。破損した箇所を再生しようとして、装着している少女の身体を侵食しようとする破片の痛みが、全身のあちこちから突き刺してくる。
「（ぐっ――クソッ……ネフシュタンの侵食が……ッ！この借りは……必ず返すッ！）」
先程の余波で抉れた地面……その真ん中に、翼は独りで立っていた。俺と響は急ぎ、翼の方へと走る。
「翼!!」
「翼さーーーーん!!」
そこへ、急ブレーキを踏む音と共に、二課の黒い自動車が停車する。
「無事かッ！翼ッ!!」
ドアを開けて出て来たのは、司令である弦十郎と了子であった。二人とも険しい表情で翼の方を見ている。

「私とて、人類守護の使命を果たす防人……」
俺達の視線が集まる中、翼はゆっくりと振り返った。ヒビ割れ、破損したギア。足元には真っ赤な血溜まり……
「こんな所で、折れる剣じゃありません……」
両眼と口から血を流し、瞳孔の開いた虚ろな目をした翼の顔だった。
そして、翼はそのまま糸の切れたように、力なく地面へと倒れる。
「…ッ⁉︎」
倒れる瞬間、イサムは変身を解除し慌てて駆け出し、ボロボロになった翼の身体を抱き留めた。
「翼……しっかりしろ⁉︎翼ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ‼」
月が照らす夜空に、イサムと響の叫び声だけが、辺りに響き渡る。
「あ……あ、あ……翼さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん‼」
「(クソ!どうする⁉︎このまま病院に連れて行ったところで、この状態じゃ間に合わない……いや、諦めるな!考えろ!何かあるはずだ‼︎何か…方法が!)」
するとイサムの周りの景色が突然と変わった。イサムは状況が理解できず辺りを見渡す。辺りは真っ白な空間に包まれていた。
「ここ…どこだ?なんで急にこんなところに」
「君を待ってたよ、不破イサムさん」
イサムは振り向く、そこにいたのは、イエローのTシャツの上に白衣を着た青年であった。

そして社員証らしき物には

〝宝生永夢〟と書いてあった。

# 第８話　青い狼とゲーマードクター

「なんとか一命は取り留めました。ですが、容態が安定してはいますが、暫くは絶対安静が必要です」
「よろしくお願いします」
リディアン音楽院のすぐ隣にある病院の廊下……オペを担当するドクターに、司令と黒服達が頭を下げる。
やがて頭を上げると、いつものワイシャツの上からスーツを着た弦十郎は、黒服達へと向き直り、指令を下す。
「俺達は、ネフシュタンの鎧の行方を追跡する。どんな手がかりも見落とすな！」
調査部の黒服職員達は、ぞろぞろと病院の外へ出ていく。
それを見送ると、奏は待合室のソファーに座って俯いている響の左隣に腰を下ろした。
「……お前のせいじゃない。翼ならきっと大丈夫だ……」
「……でも、私がもっと強ければ、翼さんは……」
響を励まそうにも、奏はいい言葉が浮かばないでいた。奏はあの時、別ポイントで単機でノイズと戦っていた為、連絡を聞いてノイズを倒した後すぐさま合流したのだ。
響だけじゃない。俺も響と同じ事を考えてしまう。イサムは無意識にライダーの絵が載ったプログライズキーを手に取り見つめる。
「(もしこのプログライズキーがなかったら、間違いなく翼は命を落としていた。永夢には借りができたな)」

時は先日に遡る
イサムは血だらけの翼の身体を抱き留めていてどうすれば良いか思考を巡らせていたら、急に周りの景色が突然と変わった。イサムは状況が理解できず辺りを見渡す。辺りは真っ白な空間に包まれていた。
「ここ…どこだ？なんで急にこんなところに」
「君を待ってたよ、不破イサムさん」

イサムは振り向く、そこにいたのは、イエローのＴシャツの上に白衣を着た青年であった。
「あんたは？」
「僕は宝生永夢、見ての通り医者で小児科医を勤めています」
「ご…ご丁寧にどうも、自分は不破イサムです。特異災害対策機動部二課の仮面ライダーを勤めています。」
自己紹介をされイサムは自身の自己紹介をする、自己紹介されたら返すのが礼儀だ。
「そんなことより、ここは一体どこだ？翼が危険な状態なんだ。あんたと話している暇は…」
「それはわかっています。これを渡すために…イサムさんの意識はここに呼ばれたんです。」
永夢はポケットからプログライズキーを取り出した。イサムは永夢の持っていた物を見て驚きを隠せなかった。
「なんであんたがプログライズキーを持ってんだ⁉？」
「このデバイス……プログライズキーって言うんですね。なんでエグゼイドの絵が載ってるか不思議だったので、黎斗さんに一度調べてもらったのですが、あの人でもエグゼイドのデータが入っているのはわかっていたみたいですが、完全にはわからないと言っていたほどでしたからね。」

◇場所は永夢の世界にあたる聖都病院のＣＲ
「黎斗さん、大丈夫かな？」
「さぁな、どうせあの神だ、神の才能ダァー！なんて言ってそのうち笑うだろ」
「まぁ……いつもの事だけどね」
永夢の隣にいるのは監察医である九条貴利矢とＣＲの専属ナースである仮野明日那だ。
キーボードを打つ音がＣＲ内に鳴り響く。その人物は檀黎斗…現

在死に物狂いで画面を睨みつけている。床にはメモした資料、数式が書かれた資料などが大量に散らばっていて足が踏める場所がほぼ無くなっている状態だった。

「…ふ、ふふ…ふはははは…！」

「黎斗？」

その時、力強くキーを叩く音と共に我関せずだった黎斗が笑い声を上げ始める。

「ふはははは…！はははッ、ハハ…ヴェァハハハハハハハハハッ!!!」

「…まさか、何か分かったのか!?」

「え、本当ですか、黎斗さん!?」

「黎斗！どうなの!?」

「…わからなァァ～いッ!!」

「だぁーッ！」

「「ずごーッ!?」」

けたたましい笑い声から一転、情けない声と共に項垂れる黎斗に永夢と明日那はずっこけ、貴利矢たちは期待外れに地団駄を踏む。

「おい！自慢の神の才能はどうした!?そんなデバイス程度に歯が立たねーとか情けねーぞ！」

「黙れェェェェェッ!!…言っておくが、決して私の才能が劣っているのでは無い！このデバイスは現段階では到底作る事は出来ない構造になっている、だから解析に手こずらされているのだ!!」

「永夢、本当にあのデバイスを誰かからもらった心当たりはないの？」

「うん、朝目を覚ましたらそのデバイスを握っていて」

「まっ、永夢は嘘をつくような奴じゃないからな、大抵嘘をつく時は何か裏がある時だし」

「しかし…わかった事が一つだけある、そのデバイスにはエグゼイドのデータがあったと言うくらいだ。」

「エグゼイドのデータが、このデバイスに、ですか」
　永夢は机にあったエグゼイドの絵が載ったデバイスを手に取る。
そして永夢はデバイスを見て何かに気づく
「あれ？これ…もしかして押せる？」
《ゲーム！》
「うわッ！」
　永夢の視界は突如と眩い光に覆われた。
「え？ここ…どこ？」
　辺りを見渡すと真っ白い空間に永夢は立っていた。しかし永夢はこの空間に心当たりがあった。
「この空間…覚えがある、スーパーヒーロー大戦の時の空間に似てる。」
　すると永夢の目の前にホログラム状の画面が出てきたのだ。

『無理ですよイサムさん！ノイズ相手に叶うわけ…』
『うるさい！俺がやると言ったらやる‼？　俺がルールだ‼？』
　映像に映し出されたのは、半透明の異形の大軍、そして白いリボンをつけた少女を守るように立つ青年であった。そして左手には永夢の持っていたデバイスと酷似したものを握っていた。
　そのデバイスはグリップが付いていたのが、永夢の物と違う点だった。
　永夢は、男がバックルの腰につけているデバイスが自身が持っているそれと確認できた。
「あれは…僕が持ってるデバイスと同じ！」
《アサルトバレット！》
『ノイズは人の大切な者を奪い、人の日常と幸せを壊す人類の敵だ‼？』
　デバイスを開こうとするとロックがかけられているのか開けることは出来ない。
『最初の俺は、怒りでノイズ共と戦ってきた。けどな！知ったんだよ…誰かの為に戦うのも悪くねぇってな、だから俺は守るべきもののた

めに戦う‼?それが……、俺のルールだぁぁぁぁ‼?」
咆哮と共にデバイスが無理矢理開かれる。
彼はデバイスを展開させバックルについた拳銃に装身させた。
『フンッ!』
《オーバーライズ!》
《ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ　ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ　ｋａｍｅｎ　ｒｉｄｅｒ》
装填された青い拳銃をベルトから取り外し、天高く掲げ、ゆっくりと正面に向け、
『変身!!』
《ショットライズ‼》
放たれた弾丸は飛来し、巨大なオオカミの形となりノイズとやらの前を通る。
《　ＲＥＡＤＹ　ＧＯ‼?　ＡＳＳＡＵＬＴ　ＷＯＬＦ!!》
弾丸の狼は少年の元に戻りそれを左手で握り潰す。
握り潰された狼は弾け散り少年の身体に鎧となって纏われていく。
涙に濡れたような赤いラインが少年の顔に浮かび上がりその上に仮面が形成された。
《Ｎｏ　ｃｈａｎｃｅ　ｏｆ　Ｓｕｒｖｉｖｉｎｇ》
中心部の赤いコアが不気味に光る。
『イサム……さん』
『そこでじっとしてろ未来…動かれると守ることが出来ねぇからな』
「変身した‼?、じゃあ、このデバイス、ビルドの時と同じ別世界の仮面ライダーの物」
永夢は未知の仮面ライダーの姿を目の当たりにして動揺するが、今持っているデバイスがあのライダーが使うアイテムだとわかった。

『……いくぞ、ノイズ共』
変身を終えた青年はノイズに向かって歩みよる。
一匹のノイズがイサムに接近し攻撃を仕掛けるが、イサムはダメージがある様子もなく拳を振り抜く。
イサムの鳩尾に振り抜かれた攻撃は効いている様子はなく、微動だにしない。イサムはそのままノイズの身体にショットライザーをベルトから引き抜きノイズの身体に風穴を空ける。

『オラァッ！』
イサムはそのままノイズに接近しラリアットをかます。そのまま何体ものノイズを巻き込み薙ぎ倒していく。
そしてイサムはノイズに囲まれ一斉攻撃を喰らうが、微動だにしない。
《オーソライズバスター！》
《ジャンプ！》
《Ｐｒｏｇｒｉｓｅ ｋｅｙ ｃｏｍｆｉｒｍｅｄ． Ｒｅａｄｙ ｆｏｒ ｂｕｓｔｅｒ．》

「ハァッ！」
《バスターボンバー！》
バッタの絵が載った斧型のデバイスを取り出し装身し、バッタのライダーモデルを模したエフェクトが浮かび上がり回転斬りを放つ。
ノイズは斬り裂かれ炭化する。

《ガンライズ！》
そして、刃を折りたたみ銃の形に変形させ、空中に飛来しているノイズを撃ち落とす。

『撃ち落としてやる』

《パワー！》

《Ｐｒｏｇｒｉｓｅ　ｋｅｙ　ｃｏｍｆｉｒｍｅｄ．　Ｒｅａｄｙ　ｆｏｒ　ｂｕｓｔｅｒ．》

『墜ちやがれノイズども！』

《バスターダスト！》

ナックルデモリションを模した大型のエネルギー弾を発射し、飛来していたノイズを全て撃ち落とす。

大軍だったノイズの数はかなり減っていた。

「凄い……あれだけいた数を一気に」

もはや勝負は見えており、蹂躙だった。

『こいつで終いだ』

イサムはショットライザーに装身されたプログライズキーのグリップのボタンを叩く。

《Ａｓｓａｕｌｔ　ｃｈａｒｇｅ　！》

『ハァァァァァ』

ショットライザーを残ったノイズに構えると、エネルギーが銃口に溜まり蒼白いオーラが収束する。

『ハァッ！』

狼型のエネルギー弾が相手に噛みつき、空中を暴れ回りながら撃破する。

《ＭＡＧＮＥＴＩＣ　ＳＴＯＲＭ　ＢＬＡＳＴ　‼？》

残ったノイズは狼の弾丸に直撃し、大爆発を起こす。

そして映像は青年がノイズを全滅させた途端、瞬間に画面が消える。

◇

「君の戦いは、ここで見せてもらったよ。」

「そうなのか、それで…なんでそのデバイスを俺に？」

「これを渡す前に僕からは一つだけ。……命は、大事にね。僕の世界じゃゲーム病とかでの復活とか例外はあったけど、ゲームとは違って人は大抵死んだらそこでおしまいだ。コンティニューできない。大切な人を失わないために、エグゼイドの力を正しい事に使って欲しい」

「わかった。大切に使わせもらうぞ。エグゼイドとやらの力を」

イサムは永夢からエグゼイドのプログライズキーを手渡される。

すると辺りの風景は変わるり意識は元の世界に戻っていた。

そしてイサムの手にはしっかりエグゼイドのプログライズキーを握っていた。

「…ありがとう永夢、エグゼイドの力、お借りします！」

《ゲーム！》

エグゼイドのプログライズキーを起動させ翼に握らせると、淡い緑色の光が覆い、翼の傷は治っていき顔色は良くなっていく。

「なっ！傷が、イサム君…一体何を…」

「話は後だ！早く翼を病院へ！今ならまだ間に合う！急げ！」

翼はそのまま病院へ搬送されなんとか一命を取り止めることが出来た。

そして現在、ずっと弱気なままの響に、イサムは近づき頭を乱暴に撫でた。
「いつまでも弱気なこと言ってんじゃねぇぞ、響…　他の誰でもない”立花響”にしか出来ない事あるんじゃねぇのか？」
「私にしか……出来ない事……」
「その答えは自分で見つけろ…俺が言えるのはそれだけだ」
イサムは響に飲み物を渡した後、病室から退出した。